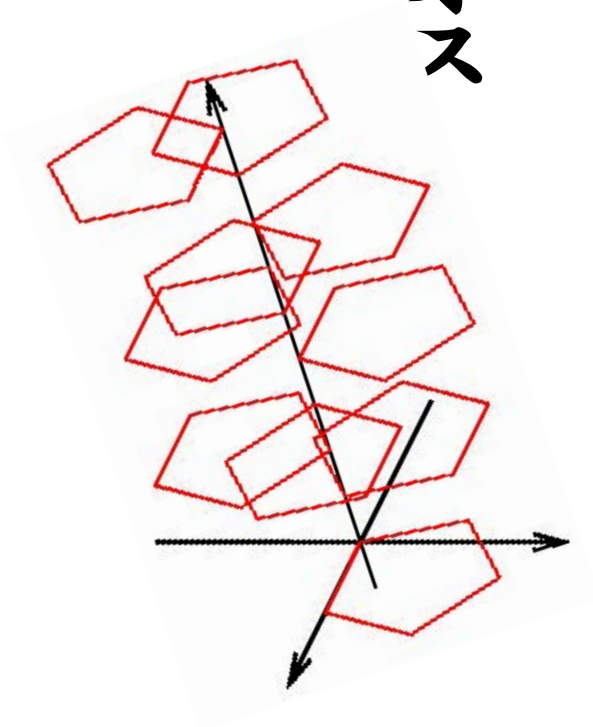


新 テ イ マ イ オ ス

新 テ イ マ イ オ ス



第1章 パルテノン神殿

飛行機がアテネ国際空港に近付いてきた。空から見るエーゲ海は明るい青に輝いて白い岸壁がまぶしかった。光宏は日本での日常から離れた非日常の世界への期待に心が浮き浮きしていた。最先端生命科学者として毎日を実験に追われる生活から一週間は離れられるのだ。RNAの働きを調べながら締め切りに追われ、他の研究者の動きを見て時には計画を変更し、修正し、また元に戻す。自分の思うように時間を使えないもどかしさに耐えながら、いつしか名前だけは有名になっていくものの、生命全体を考えるとまだ先は長いという気がするのだった。「一体、生命はどのようなようにして発生したのだろうか。」時計職人なら簡単に答えられるこの疑問に触れることすら許されない状態なのだろう。「このことを痛切に感じることがあるのだ。「一体、時計はどのようにして作るのだろうか。」と言われれば、振り子のこと、ばねのこと、電池のこと、長針・短針のことを基本とすれば、どんな大がかりな生産工場で作ろうとも説明できそうな気がするのので

ある。そして思うのだ。時計ならおもりを吊るしてその振れる回数で時間を測ることもできる。生命についてはどうだろう。三日間生きる生命さえ人工では作れない。その割には出来合いの生命についての知識は益々増え、今ではRNAの直前まで迫っている。遺伝子操作で細胞をモジュールとして使うことは今では日常茶飯事として、いわゆる遺伝子組み換えという名前で行われている。無生物から生物を作ることにも簡単にできそうである。ちよつとでもDNAができたならそれを今までの技術で様々に組み替えてゆけばよいのだ。その最初の一步が踏み出せないばかりに、生命は作れないのだ。光宏はふと夢想するのだ。アイデアを出せばよいのだ。最初の生命はこうしてできただろうというアイデアを一つ出して、それで実際に作って見る。膜で囲まれた内部でエネルギー代謝、呼吸、タンパク質の生成ができれば取り敢えず生体で、それを自己複製できるようにDNAを作ればよいと思えるのだった。その最初のアイデアが未だに一つもないことがもどかしいのであるが、今の時代である、生命作成学会を作り、自己複製機能のないアイデアを広く募集し次々と試して行けばやがて生命ができるように思われる。一つでもできたなら、それにDNAを付ける本格的実験をすればよいのだ。勿論この最後の段階は十分注意して、凶悪ウイルス実験施設並みの管理が必要ないことはない。

しかしその最初のアイデアが全く浮かばないのだ。どういうことだろう、実際に生命は発生したのだからそれ程の超絶技巧ではない筈である。但し時間はかかるかもしれない。生命発生までに7億年かかったとすると一千倍のスピードで進めても七十万年はかかるかもしれない。それならコンピュータでやれば何とかなりそうである。しかし七十万年か、相当な時間だな、いっそコンピュータを一万台使うか、勿論スパコン、それで七十年でできる。ここでふと我に返った光宏、何のためにそんなことをするのだろうと考える。それで生命はできるのか、第一、一万台のスパコン七十年借りる費用は誰が払うのだろう。冷静に考えると科学としては成立しないことが分る。やはりここはアイデア募集をインターネットに出した段階で放って置くしかなさそうである。誰かが画期的なアイデアを出し生命作成学会がそれを援助して七十万年、頑張っただけなら生命誕生の謎を解くのがよさそうである。逆に考えると七十万年は楽しめることになる訳だなどと考えると少し気が楽になるような気がするのであった。それにしても最初のアイデアぐらいは一つ提供したいものである。しかしそんなことを全て忘れるこの旅行である。明るい6月の太陽の下、古代ギリシャ人がたどった道を歩き、作ったものを見、神話の世界に遊ぶこの瞬間をどんなに楽しみにしてきたことだろう。やがて飛行機は着陸した。

空港から出ると風が心地よい。地中海性気候が甘いオリーブの香りか日本の梅雨に比べ
ていかにも爽快な気分が漂う。ホテルまでのタクシーでアテネ市内のガイドを受けてい
ると建物の全てに歴史の重みを感じるのだった。ここに二千年以上も前にいた人々が人
類空前の文化を作り上げたのだ。その時、キキイーといきなりタクシーが止まった。「ン
ガグラー。」運転手が何か怒鳴っている。見ると老人が倒れている。粗末な身なりをし
て倒れている立派なひげの老人は散らばった荷物を抱えようとしている。どうやら本の
ようである。哲学者のようにも見えるその老人はよほど怖かったのだろう、本で頭を隠
し運転手の怒りをやり過ごそうとしている。「かわりあいにならない方がいい。」運
転手はそう言うのとタクシーを発進させた。「あの手の哲学者はここにはいっぱいいる。
下手に拘わると本を売りつけられるよ。」光宏は少しがっかりした。あれだけの文化を
誇ったギリシャももう昔の輝きはないのだろうか。ホテルについてスーツケースを預け
てからパルテノン神殿に行ってみることにした。気持ちの良い青空の下ぶらぶらと歩い
てみる。デパートを覗くと大画面の液晶テレビが観光名所を映し出している。余りにも
古い遺跡が最新の映像で出てくることに少し違和感を感じる。これは現代文明が完全に
過去を取り込んでいることの証である。神殿の前で入場料を払おうとしたとき、警備員

がいきなり道をさえぎって何か叫んでいる。老人が遺跡に入るうとしているが警備員に止められている。その老人は逃げるように光宏の前に転がりこんできて本を落としてしまった。ページが開いて見えた。中々しっかりした装丁の本である。思わず拾ってみると「新ティマイオス」という題である。よく見ると先ほどタクシーで見た老人である。あの運転手の言葉が浮かぶ。「お若い、神殿に入れさせてくれないか。」

一瞬私はその本に目を落としたのを見て老人は続けた。「この本をあなたにあげよう。入場料だけ出してくれ。」
拝むように見上げる老人を警備員は邪険に立ち上がらせようとしている。見ると老人はなかなかの風貌で古代ギリシャを感じさせる。この老人と遺跡の前で写真を撮るのも面白そうである。

「分りました。この本と引き換えに入場料を出しましょう。」
警備員はあきれたような顔をしている。もしかしたら、多くの観光客がこの手で本を買わせられているのかもしれない。しかし、十二ユーロの入場料位出しても何か面白くなりそうな気がした。

「有難う、お若い。私はソクラテス、この神殿には詳しいのです。良ければ案内しま

しよう。」

老人は先ほどとは打って変わって元気になって言った。

「そうですね。私は光宏、日本から来ました。案内して頂けるなら、別に案内料は出しますよ。」

「二十ユーロ頂ければ嬉しいんですがね。」

老人は遠慮がちに言った。

「オーケー、写真も込みですよ。どこかいい場所で一緒に写って下さい。」

向こうの方に神殿が見えてきた。単なる建造物以上の大きさが感じられる。観光客がどんどん神殿に向かう中老人は何かを探すように歩いている。時折本を開いて見比べている。

「ここはいつ来ても工事しているが、まだ最初の柱が見つかっていない。」

「どういことですか。最初の柱とは何ですか。」

「今探しているんだが、入口があるはずなんだ。最初の柱は地下への入り口になっている。」

老人の出した本を見ると神殿の絵が書かれていて柱が一本だけ他の柱より太くなって

いる。

「見て御覧。この太い柱から地下に降りる通路があるのだ。今まで何回も来たが、まだ出くわしていない。必ずあるはずなんだ。」

「ここは世界遺産になる前に徹底的に調査されたんでしよう。この本だって新しそうだけど、確かな本なのですか。」

光宏は疑っていた。絵に描くなら少しの間違いが時代とともに強調されて、いつの間にかそれが引き継がれるということがあるかもしれない。

「ホメロスを知っているかね。あの紀元前十五世紀に書かれた本の記述を信じて遂に古代都市トロイを発見した人もいるのだぞ。この本によるとここにはプラトンの後期の著作ティマイオスの続編が隠されているらしい。発見されれば大発見だよ。ギリシヤは再び連続性を取り戻せる。」

「どういうことですか。」

「この本の題を見たかね。この本は新ティマイオスと言って、実は私が書いたものだ。」
「そうだったんですか。それにしても立派な装丁ですね。」光弘は呆れた。この男単に観光客に偽本を売るだけのものなのだろうか。しかし今さら後戻りすることはできない。

「そうだろう。金はかけた。しかし最近のギリシャは何といっても経済難だ。さっぱり売れない。金をかけてしまったので、宝探しも出来ない。それできつきのようなことになったのだ。実はこの本には元本がある。殆ど断片しか残っていなかったのを私が書き直したのだ。その中にティマイオスという本の続編があるということが書かれていたのだ。こうなればティマイオスの続編を探し出すしかない。私はこのパルテノン神殿こそがそのヒントを与えてくれる場所だとにらんでいるのだ。工事で多くの柱は補修され、残っているのはあと二本しかない。とにかく神殿の案内をしよう。その後で私は何とか地下に潜ってみようと思う。」

「大丈夫ですか。無理はしないで下さいよ。」

神殿の周りは大勢の観光客が集まっている。エンタシスと呼ばれる特異な形状の柱はその膨らみよりもむしろその巨大さで光宏を驚かした。

「全体を見てごらん。この建物は黄金比でできているとも言われている。高さと横幅の比が、美術的に最も美しくなるように設計されているということだ。」

「そうなんですか。しかし時代、文化が違って誰が見ても美しいというのはどんなものなんだろう。本当にそんなことがあるんでしょうか。」

「勿論、当てにはならん。後から付けた理屈だから、作るときにそんなことを考えてはいないだろう。世界中の建物を調べて全てがそういう風になっていけば別だがな。」

老人は余り信じていないようだった。光宏は知っていた。黄金比が美しいという主張をしている人がいるのは事実なのだ。しかもこの黄金比、生物に現れたり、正五角形に現れたり、宇宙の銀河の構造に現れたり様々なところに現れるのだ。もしかすると生命の基本構造にも現れるかもしれないとひそかに期待しているのだ。

「ところで新ティマイオスという本は何なのですか。」

光宏はティマイオスという本は知っていた。プラトンの後期の著作でアトランティス大陸の沈没の様子が語られたり、世界を作る基本四元素が正多面体のイメージを用いて語られている。更に人体の構造、働きについても語られ当時の科学の水準がうかがわれる本なのだ。

「プラトンの書いたティマイオスという本は知っているかね。キケロがラテン語に翻訳し、中世ヨーロッパではプラトンの代表作と言われていたものだ。」

「知っていますよ。余り深く読んだことはないけれど、火、空気、水、土の四つの元素がありましたね。」

「それは話しやすい。あの中には四つの元素があったのだが、実は正多面体は五個あったのだ。火に対応する正四面体、土に対応する正六面体、空気に対応する正八面体、水に対応する正二十面体とあるのだが、正十二面体だけには対応する元素が見当たらなかったのだ。この不足を残したままギリシヤはマケドニア、そしてローマ帝国に支配されていった。これでギリシヤ哲学は崩壊したのだが、この五番目の元素についてはその後も様々なアイデアが出された。元々のプラトンはこれを神がその上に絵を描くためのキヤンバスとして用いたと考えたそうだが、それは物質としては余りにもはつきりしない。それでその後何か訳の分らないものが現れると必ずこの第五の元素の候補にされるようになったのだ。」

老人は何故か自信に満ちた顔で話している。知らない人を見ると学生に天地の真理を教える賢者の様に見えるだろうなと思う光宏であった。

「実際は何だったのですか。」

「宇宙を満たすエーテルがこれだと思われたこともあった。」

「ああ、マイケルソン・モーレイの実験ですか。」

「その通りだ、あの実験でエーテルの存在が否定されてしまったので第五の元素は具体

化されなかった。しかし、この実験は宇宙を説明する画期的な理論、相対性理論へと発展していった。どうやらこれを考えることは宇宙を理解する道に繋がるらしいということが分って来たのだ。そして今は第五の元素はダークマターだと言う人がいる。夢のある話だろう。常に訳のわからないものを呼び出してそれが否定されるまでは候補にするのだが、今度のダークマターはそう簡単に実験できるものじゃない。従って百年くらいは言い続けられるかもしれない。」

「それが、新タイムイオスですか。難しそうですね。」

「いや違う。私はもう老人だ。百年も待てない。私はもつと違うものを見つけた。第五の元素としてふさわしいものを。それについて考えることが、宇宙を説明する画期的な理論になるようなものを。どうだね、それが確かならもうダークマターなんぞほっておいてもよくなるじゃないか。宇宙の真理を知るのに百年待たなくてもよくなる。」

「凄いですね、それがこの本に書いてあるんだ。でも、誰も認めようとしなわけですね。一体それは何なんです。」

その時いきなり声が聞こえた。

「危ない。近づくな、工事区域内だ。」

見ると、解体中の柱の一本に大分近付いている。クレーンが出来たばかりの石柱を建物の土台に据えつけようとしている。そのぶら下がった円柱が妙に揺れている。

「地震だ。伏せろ。」

誰かが叫んでいる。二人は思わず近くの柱にかけよった。地震はすぐには治まらない、吊り下げられている柱が更に大きく揺れてきた。

「危ない。」

老人が叫ぶと同時に光宏を押した。頭の上に石の屑が降り注いでくる。宙吊りの柱がぶつかったらしい。エンタシスから割れ目が生じ、二人は柱の中に吸い込まれていった。長いトンネルをどんどん落ちていく。光宏は老人がそれでもなお本を見てよーしと言っているのを覚えている。気が付くとパルテノン神殿は元に戻っている。周りはバラの花が咲き乱れ、巫女らしき人が香炉を持ってたたずんでいる。

「あなたですか、今度の戦闘の指揮官は。」

光宏が戸惑っていると、老人が咄嗟の受け答えをした。

「その通りです。我々は秘密の命令で来ています。くれぐれも他言無用に願います。彼の服装も特殊な任務のためものです。」

巫女は言わなくても分るとばかりに続けた。

「いきなり現れたので驚きました。今度の戦いはギリシヤにとっては空前の危機です。スパルタでもトロイアでもなく更に恐ろしい敵が迫っているようです。私はアテナ女神の夢を見ました。女神は「夕陽の中に風に乗って勇者と賢者が現れる。精一杯のおもてなしをするように。」と言っておりました。「さあ、もうすぐ日が暮れます。よろしいですか、今から武具を用意いたします。」

そう言うと巫女は合図をし、それとともに真新しい衣服と鎧兜刀剣が用意された。老人は既に着替えている。光宏も着替えて鎧兜を身につけた。ぴったり合うが如何にも重い。

「何でしょう。こんなものを着て、まさか戦闘に出るのではないでしょうね。」

「その通りだ、お若い。この儀式は戦闘の儀式だよ。どうやら愈々アテネも戦いに巻き込まれたらしい。」

オリーブの木だろうか、葉の付いたままの枝が運ばれて来て、神官がかがり火の用意を始めた。日が沈んでいく。季節は初夏か、氣候がいい地中海らしく風が気持ちよい。

いよいよオリーブの葉に火が入れられた。赤々と燃える炎が神殿を照らしている。神官たちが祝詞を唱え始めた。光宏にはよく分らないが、どうやら戦勝祈願をしているらしい。

「マケドニアの軍隊が攻めてくるそうだ。ここで我々がいきなり現れたのでアキレウスとその父を演じることになっている、と言っている。」

アキレウスと言うとギリシャ神話の英雄である。見ると大勢の屈強な若者が戦う準備を終えて並んでいる。合図とともに火が入れられた。

「大丈夫だ、心配することはない。単なる儀式だ。戦勝を喜しての踊りだ。」

老人の言う通り、若者たちは神殿の柱の間を踊りながら進んでいる。数十人の若者の踊りは如何にも勇壮で光宏は観光客として見ていたいような気持だった。踊りも最高潮になり老人が巫女に促されて、杖で天を指した。

「我らは勝つ、ゼウスの守護の元、敵にはいかずちが、我らには天の援軍が下る。」

神官が大声で叫んでいる。光宏は思わず立ち上がり槍を振っていた。神殿の柱の間を縫うように五つのかがり火をめがけて突進した。思いもよらない展開に若者たちは驚いて見守った。かがり火のオリーブをゆすると炎が大きくなる。そのたびに若者たちの歓

声があがる。光宏は一つ置きにかがり火を勢いよく燃え上がらせた。5つのかがり火を全て燃え上がらせて光宏は戻った。最後に槍を勢いよく天に突き上げるとそれに倣ったかのように。皆が一斉に剣を突き上げる。突然のパーフォーマンスに祈願は盛り上がった。

「素晴らしい。あの若者は。」

「ギリシヤを救いに現れたらしい。」

「今度の戦いのために遣わされたらしい。」

様々な声が飛び交っている。神官が戦いの女神アテーナーに祈りを捧げている間に二人は神殿の倉庫に向かった。巫女が案内してくれたのである。

「我々は今の人ではない。この本を見てくれ。」

老人は巫女に本を示した。

「確かに、テイマイオスの続編があると書いてありますね。しかし、私はそのようなものは見たことがありません。」

巫女は本の絵を見ながら不思議そうに言った。

「プラトンがテイマイオスを書いた後、しばらくしてテイマイオスの続編が書かれたことになっていきます。しかし、テイマイオスは後世に伝わったのですが、続編はここアテナで失われ未来に伝わっていないのです。奇妙なことに、それはテイマイオスの続編という以外には題名も分らなければ、本そのものも伝わっていないわけです。我々はそれを探しに来たのです。」

老人が言うのと巫女は少し考えていた。

「私も詳しいことは分らないのですが、あなたの探している本は神殿の地下の書物庫にあるのかもしれませんが。書物庫には世界各地から集められた多くの本が収められているのです。ただ、私はテイマイオスの続編と言われている本は見ることがありません。本の中には途中で廃棄されるものもあるのではつきりはしませんけど。」光宏は少し歯切れが悪いような気がしたが、巫女の仕事をしながらでは仕方がないのだろう。その時神官が戻ってきた。どうやら儀式は終わったらしい。

「連絡が入りました、敵は上陸したようです。海沿いの町が焼かれているということですから。丁度儀式が終わったので、我々の部隊は敵に対応するために海岸に向かいました。お客人、先ほどの演技は見せてもらいました。素晴らしい。あれで若者たちは勇気づけ

られたと思います。あの正五角形のかがり火配置を見事に使われましたね。今は戦闘が近いのでゆっくりはしていきませんが、この神殿に伝わる伝統舞踊ぜひ見てもらいたいです。ギリシャ神話からのテーマがふんだんに入っていてとても美しいものです。」

「有難うございます。この神殿の歴史はあらゆる意味で見ると値するものだと思います。もっと……。」光宏が言いかけたとき、遣いの者が息せき切って迎えに来た。「大変です、敵の軍勢が上陸して設営を始めたようです。至急、対応をお願いします。」

それを聞いて神官は出て行ってしまった。

「地下に隠れた方が安全でしょう。ついてきて下さい。」巫女達はそう言うのと先に立って進んだ。手に持ったランプが明るい。大きなドアを開けると吹き抜けの部屋があり、螺旋状の階段が下に向かって続いている。階段の壁にある照明に火を入れると火は下までどんどんと伝わっていく。結構明るくて足元はよく見えている。

「おや、この階段は結構ゆったりですね。」光宏は歩数を数えながら言った。

「この階段は十段で一回転しています。さあ、下へ降りてみましょう。」

巫女の一人が入ってきたドアを閉めながら言った。階段を五十段ほど下りると、三体の

ムーサ女神の像があり、小さな入口を通ると大きな部屋に入れるようになっていた。

「ここは、いざという時に泊れるようになっていのです。今日はここでお休み下さい。」「巫女は一つのドアを開けた。よく見るとドアは三つある。光宏はふと、後のドアは何なのだろうと思った。神殿だからだろうか。部屋の周りの壁には本がずらりと並んでいる。

「素晴らしい。これこそ、私が探していたものだ。」「老人は叫んでいる。そう言えば彼の名前はソクラテス、昔の哲学者と同じ名前だ。そして光宏も興奮を隠せなかった。ここにある本はその後ほとんどが失われた、垂涎の的となるべき本の山なのだ。しかし、残念なことに古代ギリシャ語が分からない光宏はただ眺めるだけで、その豪華な装丁に驚いたり、意外と綺麗な絵に感動するのみだった。巫女は部屋の奥の方の棚まで案内すると一冊を取り出し振り向いて言った。

「これがプラトンの著作です。この中にお探しの本は御座いますか。」「

老人は大判の本の山を漁っていた。目は輝き、手は微かに震えている。単に老人性というよりは、宝の山に興奮しているようだった。

「あったぞ。多分これだろう。私も古代ギリシャ語まではよく分らないのだが、ティマ

イオスという字が見える。おそらく、続編も近くにあるのだろう。やはり、私がまとめた断片カタログは間違っていないかったのだ。」そう言いながら自分の本をなでている。

「それでその続編の内容はあなたの書いたというこの本と合っているのですか。」

「待ってくれ、そう急がれてもまだ探し出せていないのだ。ティマイオスはあるのだが続編が見つからん。書庫はここだけですか。」老人はそう言いながら探している。巫女は感心したように言った。

「確かにあなた方は未来から来たのですね。現れた時もそうでしたし、これら本の内容も読みこなせそうですね。私にはきっぱり分らないのです。そしてこれらの本はその後どうなったのですか。」

「ティマイオスは伝わりました。今でもプラトン全集に入っています。しかし有る筈の続編は伝わらなかったのです。もしこれらの本が伝わっていたら……」光宏は思った。一体どんなことが書いてあるのだろう。確かにその後の歴史から見るとギリシャ文化は完全に否定されて実用になる物は殆ど残っていない。なくてもよかったものではあるが、人類の歴史という観点から見ると、言葉の力で、言葉だけの力で真実を理解しようとして真理に迫った始めての試みではあるのだ。

「今では非常識の極みということになって、物質を何とか理解しようとして四つの元素にまでまとめたティマイオスは当時としては画期的な本だったと思う。」老人は遠くを見るような眼で言った。

「しかも、それを正多面体と関係づけると言うところでもない理論を考え付いたのですよね。」

「しかしそれにしても大量の本があるね。ギリシヤの末期にあったこれほどの著作が我々にはほぼ失われ、かろうじて断片から翻訳されたものだけが残っているとね。」老人は本を探しながらもきも浮き浮きするように言った。光宏はこのギリシヤの老人が余りにも無邪気に喜んでいたので驚いていた。ソクラテスという名前にふさわしく純粹に知的好奇心だけで動いているのだろうか。

「ここは暗いのであちらの方で見られてはどうですか。」確かに明かりは灯しているものの本を読むには暗すぎる。巫女が案内してくれたのは薄暗い書庫とは違う明るい部屋で、読書室とも言えるようなところだった。油を燃やした光と共に良いにおいが伝わってくる。

老人が本を見ている間、光宏はこの地下空間に作られた図書保管庫を見渡していた。この読書室は妙な形をしている。正十二面体のようにも見える。そう言えば床は正五角形をしている。こういう形を作るのは結構難しかっただろうに、どうしてこの形を選んだのだろう。

「この部屋の形ですか。妙でしょう。」光宏の視線に気付いたのか巫女が言った。

「ええ、なんでこんな形を選んだのでしょうか。正方形か長方形でいいのに、この形を選んだのは何か訳があったのでしょうかでしょうね」

「そうです。言い伝えによると正方形は土を、正三角形は火、水、大気を作るので、この隠し書庫を秘密で作った神官は正五角形は生命を表すと考えたらしいのです。」

「確かに、正五角形、正十二面体はこの時代のギリシャでは魔法の図形でしょう。そもそもピタゴラスが人生を賭けて研究し、教団まで作りながら遂に理解できなかった正五角形。その後プラトンがティマイオスの中でその秘密に迫りながらも結局神々の描くキヤンバスとしか言えなかったこの図形は確かに様々な憶測を呼んでいたのですね。それを地下深くに構造物として作り上げていた人がいたとは。私の思っていた以上に進んでいたのですね。」

「そうですか。これだけの文化を發展させたのですから、戦争さえなければ、私達ギリシヤ人は正五角形の理論をもっと完璧に仕上げていたかもしれないですね。私達は一体どんな方向を目指していたんでしょう。」巫女は如何にも残念そうに言った。光宏は何としても自然を理解せずにはおかないぞという古代ギリシヤ人の意思を感じながらこの正十二面体の読書房に戻った。そこには不思議な浮揚感があった。内側から見ると正十二面体は何をもたらずのか、プラトンが神々のキャンバスと言ったのはどうということなのか思いを巡らすのだった。

「ここには泊れるようになっていっています。夜も更けてきましたので後は明日にしたら如何ですか。ここは地下ですが朝日が引き込まれるような構造になっています。時間によって正十二面体の異なった面から差し込む光が想像力をかきたててくれるでしょう。」巫女が宿泊室へ案内しようとしたそのとき、他の巫女が慌ててやってきた。

「アルテミス、こちらへ。マケドニア兵たちが増えてきているわ。警備をしないところも危なそうなの。」

「分った、今行くわ。では、あなた方はこちらで休んで下さい。」巫女は二人を残して行ってしまった。

「まずいね、この戦いは負けることが既に分っているのだ。我々としてはどうしようもない。おそらく我々のこの世界への入り方からすると、単なる時空のひずみから入り込んだだけで、取り敢えず情報を収集して元の世界に戻るしか出来ないと思う。」ソクラテスは真面目に言っている。確かにその通りだと思う。

「とにかくこの書庫の中を探して見るだけでしょね。この地下の倉庫はそれなりに工夫されているようです。プラトンが言うように四つの正多面体までは使いこなしたギリシャ人が五つ目の正多面体、正十二面体を何とかして手なずけたいと苦労した様子がよく分ります。おそらくこの形、平面で言うところの五角形、立体で言うところの正十二面体から何かのヒントを引き出そうとして作られたのでしょね。探検してみましよう。」光宏は先程巫女が言っていた通路を進んでみた。寝室、水の張ってある部屋、武器室、中には星空が見渡せる部屋まである。昼には日光が差し込むように設計されているのだろう。乾燥したフルーツが棚に収められている部屋もある。

「凄いですね、おそらくここでしばらくは立てこもれるのでしょね。」「……」いつの間にかソクラテスは乾燥オーレンジをほおばっている。

「これは美味しいよ。少しは頂いてもいいだろう。」これには光宏も呆れてしまった。

「まるで泥棒猫ですね。お金は持っているのですか。」

「大丈夫だ。我々ギリシャ人は時代を問わず皆同胞なのだ。それに私は、数千年後にこの神殿のために働くのだから。君も遠慮なく食べたまえ。君も、いや我々は結局この神殿のお役に立つことになるのだから。」そう言いながらソクラテスは光宏にもフルーツを薦めるのだった。

「これは美味しいですね。それに子羊肉の燻製もいいですね。」いつの間にか光宏も棚の食料を食べている。乾燥したパンとチーズを食べ、おまけにワインまで飲んで一寸したホテル感覚である。時々聞こえるざわめきは神官と巫女達が警備の準備をしているのだろう。

「後は明日だな。この暗さではこれ以上文献調べは出来そうもない。」ソクラテスと光宏は適当に選んだベッドでくつろぎながらいつの間にか寝入っていた。正十二面体の部屋になっている寝室は高い天井が如何にも天球を表すように星が見えている。「あの窓とか面から星が見えますね。どういふことだろう。ここは地下の筈なのに何か仕掛けがあるのかもしれないね。」光宏は昼からの疲れでうとうとしながら考えるともなく考えていた。

第2章 夢の舞台

登場人物

ソクラテス、ティマイオス、ヘルモクラテス、クリティアス、ヒロティウス

ソクラ： 4、5、6、おや、あれから大分経つねー。あの時はいい話を聞かせてもらったが、その後アトランティスは宇宙論はどうなったんだろね。あの時の驚きは今でもよく覚えてるよ。まるで脳に雷が落ちたような衝撃だったね。一体今はいつなんだろ、クリティアス。

クリ： ソクラテスあなたがそう思うのも無理はありません。あれから2500年もたっているのですから。世の中も大分変わりましたよ。今ではこの国はもう世界の中心とは言えない状態です。多くの国が現れ、滅びてゆき、変わらないのは

今日のこの天気のような青空と地中海の水だけです。国境も大きく変わり、新大陸さえ発見されたのですから。

ソクラ： そのようだね、一寸見ただけで分るよ。神殿はものすごく古くなったね。おまけに神々のかわりにシヨツピングモールが様々な素敵な言葉を用意してくれているね。前は全て神託だったものが人託とでもいうか、言葉になっていて、しかも人ですらない大きな板が声を出し、自然の風景まで見せてくれるとは。まるで、あちらにもこちらにも海があり、山があり、凄い動物が走っているようだね。エジプトの更に南にいと聞いていた動物たちがかみつきもせず走り回っているあの箱は一体何なのだろう。ティマイオス、君ならあの宇宙論でこの現実を説明できるのではないかね。

ティマ： いえいえソクラテス、私はもう度肝を抜かれていますよ。この箱の中には三角形も五角形もそしてあらゆる図形たちがいる、いや動きまわっています。私たちが一生懸命考えていたあの立体たちよりはるかに複雑な立体が苦もなく現れたり走ったり飛んだりしているのです。その速さはまるでアキレスかアポロンのようです。一体神々はどうやって姿を現し、しかもこの一メートル四方の箱

に閉じ込められてしまったのでしよう。私たちの考えたあの火、空気、水、土は変化して変化して、およそありとあらゆる形の物質に枝分かれしたようです。たぶん、あの五番目の正多面体は万有のために神に多くの絵を描かれてしまったに違いありません。我々にはめったに姿を見せず、言葉だけ掛けていた神々がその姿を現したに違いありません。ああ恐れ多いことです。果たして私が前にしたあの話が射たものだったのかどうか、罰を受けねばならないのかどうか、それが今日決められてしまうような気がします。

ソクラ：　そうでしたねテイマイオス、あなたの話が筋道を外していたら神々が正しい罰を与えて下さいと言っていましたね。おまけに神々が間違えないように、正しい罰とは間違えたものを正しい筋道に引きもどすこと、すなわち、知恵を授けることであると注文まで出していましたね。さあ、果たして、あなたの方の平穩は保障されるのかどうか、私は一寸意地悪な気持ちになって見てみたいような気がしますね。

ヘルモ：　ソクラテス、そんな意地悪な気持ちにはアテネの市民の名譽にかけて持つてはいけません。我々は戦場にあつては正しいものに勝利を、議論にあつては

参加するものに新しい知恵がもたらされることを願っているのですから。でも、ソクラテス、私は知っていますよ、あなたは正しくない行いによって刑罰を受けましたが、刑罰を与えたものよりも、受けたあなたの方が真実に近かったということ。今では、およそ人間として考えられる最高の知恵をあなたの方法が保障すると思われているのです。あの後、人間は様々なものを発明しました。それらを使って実際に自然と語りあってみました。それは実験・測定と呼ばれているのですが、自然はとても雄弁であることが分かりました。そう、私たちが神託として聞いていた言葉が測定結果と言う名前で誰にでももたらされるようになりました。そしてソクラテス、今では私たちのように集まって話さなくても、箱に向かって話しさえすればお互いの考え、違い、結論がすぐに比較できるようにさえなっているのですよ。

ソクラ：　そうですか、ヘルモクラテス、あなたはいつも最高の政治家であり將軍です。その全てを見通す力が新しい意見を言うことと並んで人類の役に立つことがよく分ります。それで私たちのあの議論はどういう決着をしたのでしょうね。

ヘルモ： それは気になりますね、ソクラテス。特に我々はあの壮大な理論を聞くだけでしたので、主張するものに比べて気楽な立場です。ここは一つ、主張した本人たちに語って貰うのがよきそうですね。これは意地悪でもなんでもありません。およそ主張したものは最後までその主張の責任と栄誉を担うべきだと思うのは私だけではないでしょう。間違っていて損害を与えていけば罰を、正しくて利益を与えていけば栄誉を受けるのが人に対する正当な報酬で、それがなければおしゃべり以外の誰も思ったことを言わなくなるでしょうからね。

ヒロ： そうなんです。それでなくはいけません。特に最近アテネのその伝統からは遙かに離れてしまったような気がします。神々が判定してくれないからでしょうか、言いつ放しの言葉、知らん振りの言葉が飛び交うと思えば、また人の言葉を平気で盗む輩も現れています。やはり言葉は神のものだったのでしょうか。言葉と火は今でも気を付けて扱わないといけないものなのです。

ソクラ： おや、あなたはどなたですか。前にはいなかった方かとお見受けしますが。

ヒロ： 病気になつていたものです。やっと治つたのです。この病はとても小さいものが引き起こしていたのです。目に見えないものが人を左右する。ソクラテス、あなた方の時代には神々が、今はこの実体が我々を良くもするし悪くもするのです。できれば特別の加護があつて良い効果をもたらしほしいものです。

ソクラ： そうですか。私の知らない世界をご存じのようですね。私は自分が知らないということだけは知っていますから、とても楽しみです。

ヘルモ： それでは、まずクリティアス、あなたから話してもらいましょう。

クリ： アトランティス島については、驚くことにこの二千五百年、殆ど状況が変わっていません。海の底と言うこともあり、その後同じようなことが起きなかつたということもあつて伝説として語りつがれるだけです。もしかしたら私の報告がそのまま鵜呑みにされているのではないかと思うほどです。確かにアトランティス島で起こつたあの大地震と大津波に匹敵するものはその後全くなかつたのです。従つて今でも島の消失という事件そのものがなかつたという説も有力だということです。私も祖父がエジプトの神官から聞いたという以上には知らないのです。しかし島はその九千年も前に忽然と海中に没したということはその時に

は信じられませんでした。後世に伝える責任を感じて、ソクラテス、あなたにもお話ししたのです。しかし、今日ヒロティウスのお話を聞いて、そんなこともありうるのだと思うようになりました。

ヒロ： そうなのです。2011年に日本で起きた大地震は日本の一流の大学の研究者が言っていたようにおよそ理論では予期できないものだったのです。この稀にしか起きない現象については現代も古代ギリシャとそれ程変わらない状況が続いています。なにぶん、千年に一度起きるかどうかという地震ですから、クリティアス、あなたの知識は今でも役に立っているのです。そして今だからこそ検証可能なものとなったのです。我々はあなたの方の開発した思考方法をその後の二千年で発明された様々な器具によってやっと利用できそうなところまでできたというわけです。

ヘルモ： そうですか。それは良いことでも悪いことでもありませんね。クリティアス、あなたの伝えた知識は数千年の時を越え引き継がれています。現在でも悪魔の厄災をもたらしている地震、津波への警鐘として十分な意義を持っているように思われます。我々がもしあなたの警鐘のあと自然への敬意を失わず十分な準

備をしていたら、今頃はどんな地震にも耐えうる都市を作っていたことでしょう。どうして現代人はそういう意識を持たなかったんでしょうか。我々の古代ギリシヤを頂点としてフィロソフィアは失われたのでしょうかね。

ソクラ： よく言ってくれました、ヘルモクラテス、私は今猛烈に感動しています。確かに私は死刑宣告を受け、良く生きるために逃亡もせず毒ニンジンの杯を飲み干しました。プラトンがいなかったなら私は妻にも見放されたやくざ者として歴史のかなたに消えていったことでしょう。しかし、期せずして、ヒロティウス、ヘルモクラテスは私の方法が無駄ではなかったと言ってくれました。デルフオイのアポロンの神託以来のこの助言は私を勇気付けてくれました。地震、津波についてはまだまだこれからだということも良く分りました。宇宙論はどうなのでしょうね。小さいものよりも大きいものの方が取り扱いやすいとも言います。さあ、新しい話を聞いてみたいものです。なにぶん老人というものは先が短いので一刻も早く、死ぬ前に、納得できる話を聞き終わっておきたいものなのです。ヘルモ： そうです、急ぎませう、ティマイオス、あなたの話は長くなりそうですね。今空を見れば、さしものこの地中海の晴天にも遠くの方に厚い雲が見え、

時折、雲の下が明るく光るのは、神様でも何でも雷のように思えます。ニンフたちが現れて踊りを踊る前にこの大事な問題に方を付けてしまいました。

ティマ： 私の宇宙論はそれはそれは進歩しました。あの後アリストテレスによってまとめられたときにはまだ威張っていられたのですが、何といてもレンズとそれを用いた顕微鏡ですね。私たちの理論はこれによって見えないものが見えるようになり、それまでは麓から山を見て山の形、山の並び方、天候、森の分布、水源、植生、岩石の色、水の流れ：などいろいろ言っていたものがいきなり山の中に入って木を触り、虫を観察し、雨粒がどうなるのか、風が果たす役割、日光のはたらき、動物と植物の関係などを見聞きするようになるほど劇的に変わってしまいました。しかもその流れは更に加速しているようです。もうとても私の頭では捉えきれません。クリティアス、あなたは自分の知識が今でも役に立つことに複雑な思いではないですか。折角、神々の世界から駆けつけたというのに何も新しい成果が上がっていないなんて、自分の努力は人類の役に立ったのだらうか、と思うことはないですか。

クリ： いや、これからでも役に立つということでも十分です。

ティマ： それに比べて私はウサギとカメのウサギみたいな気持です。先頭を走っていたはずなのに一休みして気が付いたらカメがとんでもない先を走っているのですから。しかも私には思いもつかなかった道具を持って走っているの差は開く一方で全く手も足も出ません。おまけに国家ももう出来上がっていて、どうこう言えるものではありません。例えば職業別に生活を別なものとするこによって世襲制を維持することは全く無理な状況になっていますし、国家を家族として私有制を排除することは正にそれと逆な仕組みになっています。婚姻についても良い男と良い女、悪い男と悪い女を組み合わせて分離して育て、常に良いものを選別していくという我々の考えは完全に否定されてしまっているのです。かろうじて女神が用意した武器での武装は特別な国を除いてほぼすべてでしっかりと装備されていきました。勿論、新しく発明されたものを使っていますので性能は格段に進歩していますが理解し使いこなすのは困難なことではないようです。しかし私はもう疲れてしまいました。何のためにここに出てきたのかさえ分別が付かないような気持ちです。もう神にでもすがらなければ何も出来ないに違いないりません。私はこう呼びかけます。「どうか我々の話す内容が全て神々のお気に

召しますように、そして私の意に沿ったものとなりますように。」と。そしてあなた方には「私の話す内容が出来るだけ容易に分ってもらえますように。」という言葉も付け加えておきましょう。

ソクラ： テイマイオス、あなたは正しいことを呼びかけました。今まで誰も言わなかったことについて語るのは難しいことです。どんなことであっても、少なくともあなたがそれを言う意味を見出すならば、そのことを考えた人が今まで一人もいなかったというのは滅多にあることではありません。ほとんどはその考えを進めてゆけばやがてのつびきならない困難が生じるために放棄された残骸であるということだと考えるのが普通です。その困難と言うのは必ずしも問題にしているそのこととは限りません。それはときには使っている言葉の問題であったり、誰かがついたとんでもない嘘だったり、生活習慣の所為だったりします。しかし、言論の対象が真実の一端を担っているのなら、それについて語ることは神々も大目に見てくれることでしよう。さてテイマイオス、あなたは何を語ってくれるのでしよう。

ティマ： それは四つの元素と言われた火、空気、水、土についてのことです。この四つの元素に対応する正多面体は三角形を基本とする面を持っています。それは直角二等辺三角形と正三角形を合同な二つに分けたものからなっています。まず正四面体が火の元素に割り当てられ、正八面体が空気に、正二十面体が水に、正六面体つまり立方体が土に対応しています。ここまでは時代が変わって元素の意味と内容が変わった今となってはその正否を論じてもしようがないので、この儘にしておきましょう。つまり現在では物体とはティマイオスで語られている四つの元素以上に複雑化しており、もはや正多面体との対応関係を云々することは出来そうもないように思えます。しかしソクラテス、私はここに奇妙なことを見つけたのです。

ソクラ： それは素晴らしい。ぜひ聞いてみたいものです。奇妙さと言うのは発見への道しるべと言えるのです。箱一杯の猫の中に同じ大きさの一匹の犬が入っている場合、我々は毛並みが同じでも手足の形がよく似ていても何か奇妙さを感じます。何かが違うのです。何も言わないときは全く同じように見えるのですが、つついてみると声が違っていたりします。奇妙さを見つけそれを様々な仕方で扱

ってみることで新たな実体が浮かび上がってきます。テイマイオス、あなたの見つけた奇妙さとは何でしょうか。はやく話して下さい。ああ、急がせてすみません。私は年齢の所為か待てなくなつたようです。デルポイにあるアポロンの神託所のようにゆっくり待たなくてはとは思うのですが、私も二千年ぶりです。どうして早く先を聞きたいと思うのです。四つの元素は自然の有りようを四つの観点から見たということなのでしょうが、あなたの言うその奇妙さとはどういうことなのでしょう。

テイマ：あの時には気づかなかつたのですが、火、空気、水、土という四つの元素は化学反応、気体状態、液体状態、固体状態を表していたと思われます。これに正多面体を対応させたのが、とんでもないアイデアでした。よくあることなのですが、我々はシンボルを用いて物事を説明しようとしています。ところがシンボルが全く同じ内容ならいいのですが時としてシンボルと物事が異なる設定領域を持つことがあります。例えばコインの表が出ることを+で表し、コインの裏が出ることを-で表すことにしましょう。さてコインが立ったときはどうすればよいのでしょうか。それは予期されていないので、普通はやり直しになります。しか

しコインの立つ状況が大切なことならそれには新たなシンボルが用意されなくてははいけません。確率から考えてそれは0がよいでしょう。もしコインの立つ確率が五百回に一回なら、十の目盛は250まで、一の目盛も250までにすれば全体の状況をしっかり表せることになります。さてテイマイオスでは元素は四つでしたがシンボルとしての正多面体は五つでした。この物質とシンボルの対応性の正統性は散々論じられていますが、結局のところはつきりしませんでした。五番目の元素はその時には思いつかれず、神がそこに動物の絵を描くキャンバスとして用いたということになっています。口の悪い読者はそんなものは、そんな正統性は初めから無く、どうにでもできるものだったのだと言うでしょう。確かにそうかもしれません。物質とは言ってもそれを四つの元素からなると言わずに、「あるだけある。たとえ何万、何十万、何十億、何十兆　：となってもよいのだ。絶対に正しいことは、物質のあるだけの個数全てにシンボルをあてはめれば分るのだ。」と言うでしょう。これは正しいのですが、人間には無理だということなのです。そんな大量の情報を扱うようにはできていないのです。それを正しいからやれと言われたら、黙って仕事をし、食事をし、遊びに行き、眠るしかないの

です。そこで賢い人々は四つのシンボルで理論を作りそれで良しとしたのです。もし五つ目が必要なものならばこの理論は全方向に発展するのではなく、特殊な発展構造体を作ることでしよう。そこでテイマイオスは書かれたのでしよう。そして歴史の中に投げ入れられました。確かにこの理論はいびつな理論でした。それなりに発展はしたものの、やがて国家は衰退し、それとともに科学も衰退してしまいました。やがて時代が移り北部ヨーロッパで再び科学技術が発達してきましたがその中では間違った科学ということを取り上げられることが多く、芸術での大きな成果とは違って殆ど考慮されませんでした。しかし今となって思うのはその後の科学の歴史です。イギリスの産業革命を契機として科学は再び大きく発展し始めました。ギリシャの間違った科学はアリストテレスの名とともに大きく取り上げられ、間違った理論がどんなに蔓延していたか、それに比べて現代科学はどれほど進んでいるが盛んに宣伝されました。ヒロティウス、あなたの話がとても印象的でした。我々の間違った方法と違って、人々は実際に自然に確かめてみる方法、つまり実験で確認しながら、科学を進めることを思いついたらしいのです。これによって科学は飛躍的に発展しました。見れば見るほど、その広がり

深さに感動します。自然にはなかつたものを大量に作り出し、その恩恵を受けて人々の持ち時間はとんでもなく改良されました。一生の間に自由に使える時間が飛躍的に増えたのです。ギリシャ時代には一週間もかかった移動がわずか数時間でできるようなったのです。とても動かせないと思われたものが楽々と動かされています。治ることはないだろう、神の加護を願うしかないと思われた病気がたった一つの医薬品で嘘のように治っています。絶対に不可能だと思われたことが実現しているのです。正に奇跡の連続です。これが実験を基礎にした科学の成果です。ギリシャの、理論を基本とした科学から脱却したせいで、次々と新しい現象が見つかっています。その勢いは遂に生物にも及んできました。遺伝子組み換え技術による新しい薬の開発、新しい臓器の作成などが日程に上がっています。もはやギリシャの科学は過去のものであり、この新しい科学で全てはうまくいくように見えます。こんな状況ですが、しかし、ただ一つ、全く進歩していないものがあるように思えるのです。それ以外のことがおよそ想像力の限界を越えて発展しているだけに極めて奇妙な感じを受けるのです。それが生物の基本理論です。生物が原子・分子からどのようなようにして出来たのかは私たちには分っていません。

したが、同じくらい現代でも分っていないのです。どうしてでしょう。これほど奇跡的な科学の発展した現代においても全くその端緒すら知られていないのは何故でしょう。私は今、ギリシヤ人として、この第五の元素を見つけないことが原因ではないかと考えています。そのために人々の考え方に致命的な欠点があつて、それがこの二千年間変わっていないからではないでしょうか。

ソクラ： それはなんでしょう、テイマイオス。この四つの元素に匹敵する重要性を持つ物質で、私たちが理解できるものとは。勿論それはシンボルとして正十二面体があてはめられるべきものともいえるものです。この正十二面体は神々が絵を描くものとして用いたと言われてきましたが、まさか、それは生命そのものであると言おうと思つていないのでしょうか。

テイマ： ソクラテス、私はそう言う積りでした。もしあなたがそれを認めてくれるなら、私はこれを『生命』の元素と言いたいと思います。『エレメンツオブライフ』です。

クリ：　ほう、それはまたユニークな観点ですね。中々面白いですね。生命も火のような物質の一つになるのですね。：ちよちよと待ってくださいますよ、影響が大きすぎませんか。

ソクラ：　テイマイオス、確かにクリティアスの言うとおりです。この影響は各所に及びますよ。生命が物質だということになると：。それはあたかも四本の糸でできた織物に五番目の糸を加えるときのようなのです。よく考えてみましょう。この五番目の糸は人間まで含んでいますよ。テイマイオス、これは重大な問題です。確かにあなたは奇妙さを感じ、それを当たり前のものとするためには第五の元素を生命としなければならぬのでしようが。我々の信じる神々はどうなるのでしようか。我々は神々に似せて作られたと言われているのに。この宇宙論を作っている人間まで物質の一部になって織物の糸になっているというのは尋常な構造ではありません。アポロンの神託所にお伺いを立てなければなりません。もう今では神殿は神託を出していないようですが。一体この複雑にもつれた糸を引っ張ってみるべきものでしょうか。ヘルモクラテス、どうでしょう。

ヘルモ： ソクラテス、あなたの言いたいことは分りますよ。我々ギリシャ人は神の言葉を聞き、神の姿を見、神を感じて多くの果実を味わってきました。オリンポスの山の十二神を忘れることなく、全てをそこに依存してきました。それなのに二千年の歴史を破り、ここでいきなり生命は物質と言う主張ですか。これは自分の尻尾をくわえるウミヘビです。説明しようとする者が説明されるものの中に入っている。生命が物質の一形態だなんてことがあったなら、神々は消えてしまいます。

ソクラ： ありがとう、わが友ヘルモクラテス。生命が物質の一形態ならば一体なんだって人間は生まれてきたのでしょうか。今まで二千年以上かけて考え、出した結論を根本からひっくり返し新たな存在理由を探すことになるうとは全く想像もありませんでした。人間が今おこなっている行動から考えると、人間は明らかに神の似姿として作られ、神々の国を目指して国を作り、神々を讃えるために生かされていると考えるのが健全ではないでしょうか。ところがあなたの今言ったことはそれを根底からひっくり返しています。確かに、そう考えてはいけないというルールがある訳ではありません。しかし…、ああ何ということだテイマイ

オス、私たちはいつでもある暗黙の前提の上に物事を考えているということをおなには…、忘れて、と言うか、飛んでもないことを考えたのです。あなたの考え以外には解決策はないのですか。生命を理解するのに、生命を元素と考えるしかないとは…。あなたの言いたいことは分りますよ。しかし、よっぽど切羽詰まって、もう他には考える方法がないという時以外、考えてはいけないことをあなたは考えています。全世界の人間のうち、あなた以外の何億人もが信じている神への愛をおなには崩すかもしれないのですよ。そこまでの犠牲を払ってでもあなたの主張は言う価値があるのですか。私にしても、デルポイにあるアポロンの神託を受けて一生活動しているのですからね。たぶん多くの人達もそうだと思います。皆、神の名の下で生活しているのです。それが大前提なのです。はっきりこの大前提を崩す理由を説明してください。そんなことができるのですか。あなたはただそれをはっきりとは言っていない。そう言うわけでティマイオス、あなたの折角の発見は神々のいる限り認められることはないのです。

ティマ： ソクラテス、あなたらしくもない。あなたはもつと冷静に事実のみを考えてくれるかと思っていました。しかし、分るところもあります。あなたは自

然科学についてはそれ程詳しくないのですね。実はこのテイマイオスの話はあなたの不得意とする自然科学の話になっていいるのです。ここでは、知らないと言つて通りすぎることはできないのです。弁論に負けない話し方ではなく、事実を引きだすような話し方が必要なのです。そのためには不確かな話を反駁されない用意をするのではなく、不確かな話をして、どうすればそれを確実な話に持つていけるかの知恵を出すための弁論が必要なのです。ソクラテス、今、私はそのような話をあなたに投げ掛けています。あなたの、間違いを間違いと言う明晰さを持つて私の話に嘘が潜んでいないか、どうすれば真理に到達できるのか考えてほしいのです。もしかしたら、その結論はあなたの心配している通りのものになるかもしれません。私が、私はそうは思いません。我々の神は昔はどんなことでもやってくれました。ある時には人の運命を決め、ある時には人の生死を決めました。なくなつた物を探し出してくれ、必要なものを与えてくれました。とても信じられないような試練を与えるかと思えば、ある時には窮地に立った人々を救い出してもくれました。我々は神とともに生活し、神に祈り、神を愛し、神を敬うことによつてより良くなることができました。あなたが人生の目標を得たのも神の言葉

のおかげでした。神の言葉に啓発されて。あなたは行動し、議論し、多くの正しいものを身につけていったと思います。しかし、あなたが没してから二千年、人々は神に助けられて、神に迷惑をかけずとも生きられるようになりました。病気については薬のおかげで今では神に頼らずに治すことができます。心配事があっても今では遠くの友人に会いに行くことができます。神に頼らずに、直接相談し、慰め、解決することができるようになったのです。生死の問題も自分たちで何とか、不十分ではありませんが、解決できるようになったのです。そして、今では神のお造りになった生物たちの手法をまねて様々な便利な物質を開発できるまでになったのです。今まさにこの方法は急速に進歩し、最先端医療を築きつつあります。これがこの二千年の変化なのです。それではあのギリシャの理論はどこに行ってしまったのでしょうか。全くの荒唐無稽な出鱈目としてソフィストとともに滅び去ったのでしょうか。私はそうは思いません。確かに私たちの気付かないことは多くありました。しかし、現代達成されていないこともまた多いのです。その中のいくつかは達成されうることだったのでないかと私は感じたのです。も

う少し話させていただけですか。何故正十二面体で象徴されるものが生命でなければならぬかを。

ソクラ： それではもう暫くお聞きしましょう。しかし、忘れないでください、この話を聞くことは私にとって十分に苦しいものであることを。現代はとても便利な言葉があります。それを使って言いましよう。あなたの話を聞くことは私にはストレスなのです。それでも私があなたの話を聞くのは、私がアポロンの神託「ギリシャであなた以上に賢い人はいない」に対して持っていた漠然とした不安を解消できるのではないかと期待だけなのです。

ティマ： ありがとう、ソクラテス。私がここまで自分の考えにこだわる理由は、全てが飛躍的に発展した二千年後の現在でも生命の発生の起源が全く分っていないということにあるのです。普通は出来たものを遡って行けばやがて必ず、最初のものにたどり着きます。少なくともより複雑なものから簡単なものが新しく作られることはまずないわけですから、現在ある物を徹底的に理解すれば、より簡単な物が思い浮かび、それを何回か、せいぜい十何回か繰り返すと、初めの姿が思いあたるというわけです。ところが生命に限っては、我々の最も興味のある

ことでもあり、様々な人が初めの姿を思い描いたわけですが、どれも合点のいくものではなかったようです。それどころか長い研究にも拘わらず、基本メカニズムすら全くつかめていないのです。しようがなく、全ては偶然であるという理論を作っているのですが、この考えは時間稼ぎによく使われるものです。さいころで七の目が出ないのは、さいころについてよく知らない人にとっては偶然なのです。昔、機械を分解したことがありましたが、全てを分解した後に組立ててみるとよく部品が余るものです。この余った部品こそ正五角形を表面に持つ正多面体である正十二面体に他なりません。正十二面体がないとどうなるのか。もし機械が精密なものであれば動かして見ると何ができないかが分ってきます。普通はある特殊な動きが何故かできなくなります。そしてそれこそがその部品が担っていた役割だったわけです。もうお分かりでしょう。私はそれこそが生命の基本メカニズムだったのではないかと想像したのです。

ヒロ： ちよつちよつと待って下さい、テイマイオス、一体その正二十面体とか正五角形と言うのはどういうことなのですか。一体生命とその正多面体とはどんな関係があるのでしょうか。生命は全て正十二面体と正五角形からできているとい

うことではないのでしょね。生命というのは基本的にはDNAを設計図として作られているのではないのでしょうか。DNAというのは二重螺旋構造をした分子ではあります。正十二面体でもなければ正五角形でもないように思えますが。ティマ：　そうです。しかしDNAは螺旋構造をしています。十塩基対で一周期をなし元に戻ります。これを用いてみましょう。このことは一つの塩基対ごとに36度のずれが生じることを示しています。正十角形の辺の作る中心角は36度ですが正十角形の各辺に正五角形を付けていくと図1のようになります。つまりこれがDNAの基本型ということができるとはいいですか、この形は十個の要素で一周期ということ表現しているのです。これを現実のDNAに持って

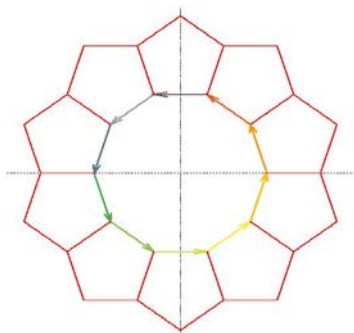


図 1

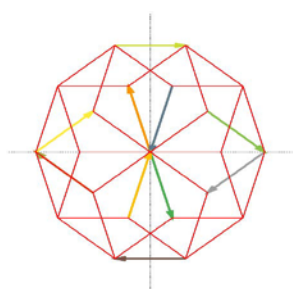


図 2

いくにはこの内側の空間に、正五角形を入れてみれば分ります。それが図2で十個の正五角形をこのように配置すると図1と同じ対称性となります。この時、正五角形はお互いに重なりが生じており、必然的に面に垂直な方向に立体構造を持つこととなります。これが螺旋状になりDNA構造になる訳です。

ヒロ：なるほどそれでDNAと正五角形に関係がないわけじゃないことは分りました。つまりDNAの持つ周期性を正五角形で説明できるということなんですね。

ティマ：そうです。他にDNAのこの、十塩基対で一周期ということの説明できるモデルはないようですよ。これは確かに状況証拠だけけど、生命を作った創造主がいる以上、こういう証拠を着実に積み上げていけばやがて真実に到達できるというのがギリシャ風生命理論ティマイオスであって、現在の欧米流と違うところなんですね。私の見るところ二千年たっても生命の基本すら見つけられないようでは欧米流はある種のミスを犯しているのでしょうか。ついでにもう一つ言っておきましょう。tRNAは三つの塩基対で一つのアミノ酸を担保していると言われていきます。

ヒロ：　テイマイオス、よく知っているねー。私の習った最近の知識では四つの塩基の三つ並びの仕方は四の三乗で六十四通りあってそれで二十種のアミノ酸がコードされています。当然重複もあって六つのコードが同じアミノ酸をコードしていることもあります。しかし、何故アミノ酸は二〇種か、何故トリプレットコードなのかはわかっていないと思うんですが、それも説明してくれるのですか。テイマ：　察しがいいねー、ヒロテイウス。tRNAは図3のタイプだと考えましょう。これだと正五角形三つで平面は使い切ってしまう、次の塩基は一つ上の

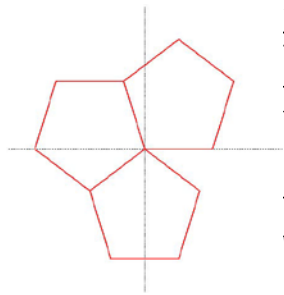


図 3

面につくしかなくなります。つまり不安定になる訳です。この形はグラフィイトと違って空隙のある平面を構成し、特に水との境界面においてはこの形で溶け出していると思われまます。この三塩基構造が準安定であることがtRNAが

存在する理由であって、生命はこれを用いてアミノ酸を結合し、更にはタンパク質へと進化していったことになるのです。そうになるとタンパク質は六十四種以内のアミノ酸からできていなくてはならないことなのですが、幸い現在タンパク質の材料となっているアミノ酸は高々二十種ほどです。それで生物が出来てしまったのは御の字で、もしそれでも駄目だったならこのトリプレットは更にアミノ酸の種類を増やしていったに違いありません。

ヒロ：　　うわー、いきなり難しいね。そうすると、トリプレットが36度の隙間にアミノ酸をくっつけて準安定もRNAとなり、海水中を漂う打ちにどんどん成長してゆくということですか。神はいつでもあらゆる方向に物事を動かしていて生命というのはその一つの表れで、偶々、二十種のアミノ酸が作ったタンパク質が生命という形になったということなのですね。

ティマ：　　そうかも知れないね。わたくし、ギリシャ人としてはそれ以上のことは関心がないのです。神々と自然科学はともに存在するもの、生まれたものであってゼウスのことはゼウスに訊き、自然については自然に訊くというのがいいのです。自然について何か分ることがあるたびに、それは大きな枠の中に取り込ま

れていきます。私は今、生命を正多面体のテーゼの中に取り込んだというわけです。これは前の私たちにはなかった発想でした。それは、生命が物質ならば、私たち人類の聖性、つまり神から選ばれた生命としての人間がなくなってしまうような気がしたからです。しかし、この二千年間、正十二面体がひいては正五角形が全く考察から抜け落ち、生命についてもその起源の解明が全く進んでいない状況を見ると、もういいではないか、二千年の停滞から抜け出し新たな知見へと向かって、と思えたのです。

ヒ口： 有り難いことです。我々の現状を見て判断してくれましたね。あなたが感じたとおりに、我々は自然について考えることはとても進歩しましたが、自身自身のことについては考えることをストップしてきたのです。このことについて考えるとどうしても、神が特別の存在として人を作ったという問題が顔をのぞかせてきます。他の物体についてはどうでもいいのですが人だけは特別の注意を払わなければならぬというわけなのです。そこで科学がある水準に達してから我々は一寸した技を使うようになりました。それは、事実のみを語り、哲学をしないということなのです。地動説での大騒ぎ、進化論での大騒ぎを見るまでもな

く、哲学することが常に危険を伴うことに気付いた我々は事実を見ること、それを産業にすることに態度を変えたのです。最後の自然哲学者アインシュタインはとても危ないところまで来ていました。途中で気がついたのでしょうか、彼は語るのを止め、流れに任せたのです。しかし、これは原爆と原子力発電というコントロールしかねる二つの技術を生み出しました。そう言う意味ではこの生命の理論も余り深入りしない方が良いのではないかと我々は考えています。

ティマ：なるほど、時代が進み、文化が進んできたのですね。どうですかソクラテス、あなたはどうかお考えですか。

ソクラ：私も今そのことを考えていたところです。私たちは人はどのような生きべきかということを考えていました。そして多くの考えを出し、それがあつものは受け入れられ、ある物は拒否されながらも全体として人々はよりましな考え方をするようになりました。文化の時代だったわけです。どうやらその後文明の時代に移りまた文化の時代が来てギリシャの再評価が行われ、またその精神的基盤の上に文明が発展するというように進んできたのでしよう。そして今は文明の時代で多くの新発明がコンピュータ、通信そして医療の面でなされているよう

です。その代わり哲学は失われています。どう生きるかというより何を使って生きるか、物質面が強調され、またそれに対応して多くの製品が開発されているようです。私たちはともすると生命とは何かなどを考えようとしませんが、ティマイオス、どうやら今の時代の人はヒロティウスのように使用価値をまず考え、それを享受することをまず求めます。従って生命についても、それがどう発生したかを探るよりは、どのようなようにしてより役に立つものを作っていけるか、そのために必要なことをまず考えようとしてより役に立つように見えます。私たちの時代とは逆に、生きることはたやすく多くの人が生きていますが、そのために様々な手段が開発されなければいけない時代なのでしょう。そんな中で生命の元素がどんな意味を持つのか今一度考えてみないといけませんね。

ティマ：　そうですか、折角昔私達が考えていたことに解決の糸口が見つかったと思ったのに。しかし、このこと、生命が何からどのように発生したのかは皆興味を持っているのではないのでしょうか。そのことが分れば、我々がどのように生きてゆけば良いのか、将来のためにどのようなことを考えればよいのかはつきりするのではないのでしょうか。

ヒ口： その通りです。要するに我々現代人に創造力が欠けているのです。我々が今行っていることは自然から学ぶということです。生命はどうあらねばならぬかという理論を捨て、実験で事実を確かめていくという方法を確立した現代人は、文明の開発した様々な実験装置を使って、いわゆるミクロの世界に入り込んでゆきました。生物の持つ全てをミクロの目を通して見ることにしたのです。その結果、生命について完全に理解するには電子レベルの観察が必要だということを知って方針を立てたのです。それは次のようなことです。生命を理解するため全てを調べきるには途方もなくお金がかかります。今までの1万倍の細かさで見ようと思えば見られるのですが、目に頼ることはできません。機械装置が主な道具となり、その装置の値段は精度の高いものを求めていくといくらでも高くなります。昔のように頭を使って成果を上げるのではなく、お金を使って最新の装置を持つことで成果を上げるのです。この方法は結局、科学といえども経済活動ということになり、二つの枠組み、産業としての枠組みと学問としての枠組みを抱えることとなります。そうになると哲学のみではなく産業も科学の原動力となります。つまり今までの初めに哲学があり、その一つの帰結として科学が発生し、

それに伴って産業が発生するという状況が崩れてきたのです。この変化に応じて我々は態度を工夫するようになりました。まず費用対効果比という考えがあり、次に今ではもっと重要になった時間対効果比という考えがあります。問題はこの考え方を社会が認めるようになってきたことです。そこで、冒険する余地がなくなり、そのために社会の活力が失われてきました。金を掛けた人は必ず掛けた金を取り戻そうとします。そのためには冒険はできないのです。冒険することは金を取り戻す確率を必ず下げることをする多くの人は知っているのです。その結果、誰も生命の根本など知らうとしなくなってしまうのです。着実に仕事をしてまず掛けた金を取り戻し、しかる後に新しい掛けに入るのだという考えでは現代の新しい真実は手に入りません。現代の真実探しは誰か金持ちがスポンサーとなってくれなければ動かなくなつたのです。こんな状況にありながらもなおかつ、ティマイオス、あなたの言うような理想が適うためにはたつた一つの方法があります。しかし、そんなことが起こるものなのでしょうか。私には、ソクラテス、あなたが百回毒杯を飲むような状況で始めてそんなことが起こるのでしょうか、我々のこの話が世間の圧倒的な支持を得て、あらゆるところから賞賛の声が湧き、応援

者がどんどん現れるようにでもならないと無理だと思えるのです。それは今から語られる話に依るでしょう。それでも、テイマイオス、話を続けましょう。一体全体何故、あなたは正十二面体が生命を象徴している、そして、その表面を覆う正五角形が生命現象の根幹をなすなどと思いついたのですか。…そう言えば思いついたことが一つあります。正五角形と言えば黄金比が出てきますね。そうだが、それなんでしょう。黄金比と言えばフィボナッチ数列の極限であって、この数列はよく生物に現れるということ。確か、ヒマワリの種の付きかたや植物の枝の出方にそれは関係していると言う本を前に読んだことがあります。それですか、それなら、どうでしょう、もつともつと強力な証拠がないと話が続かないような気がします。

ティマ： 有難う、ヒロティウス。あなたの期待に応えるように頑張ってみましょう。唯一つ、私に有利なことがあります。よく見て下さい。私に足がありますか。私は今から二千数百年前に既にいなくなっているのです。その私が語る生命の秘密、生命はいかにして一介の分子から超巨大分子になり上がったのか、それが単なる物質でありながら、その枠を越えようとしているのは何故なのか。古代

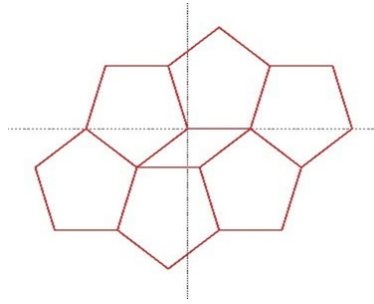
ギリシヤで起きた、全てを経験から解き放ち、完全な論理の上に全ての現象を再構成しようという試みは今復活するのか。ひとたび、完全に否定された、アポロンの夢をここで展開して見ようじゃありませんか。ソクラテス、あなたもお手伝いいただけるんですね。

ソクラ： 私は聞いているよ。アポロンが出てきたからには、私が聞かないわけにはいかんじゃないか。しかし、テイマイオス、君も知っているだろう、私が知っていることは唯一つ自分は知らないということだけだということ。今考えてみると、その後の二千年の年月が示している通り私たちは余りにも知らなかったのではないか。あの時代に既になんでも知っているように思いこむ人々がいたということ、：言い難いんだが、今もいるということだろう。私はそこだけを確認しながら聞いていくことにしよう。実験主義の足元をすくって、全くの曖昧模糊から理屈だけで生命の謎を解き明かすとは。これを聞いて現代人は何を考えるか、それとも：たぶん最も起こりうることは、無視するか、どうなんだろうか。ヒロ： どうでしょう、私は無視されるような気がします。この忙しい現代に人々はこのような何物も生み出さない議論には興味を示さないのではないでしょう

か。もつとも、この議論から実際に繁殖する生命が生み出されるなら別ですが。しかし、先ほども言った通り、生命現象はその完全な理解のためには装置が非常に高価なものに付き、そのもつとも簡単な源生物すら到底生み出すことはできないのではないかと思います。

ティマ： それでは始めよう。さて、生命について理解するためにはあのなんの用途も考え付かれず神々のおもちや箱、デッサン用紙として扱われていた正十二面体が必要であって、それこそが第五の元素に対応するものだとなれば、ピタゴラスでなくとも正五角形からはじめたくなくなるでしょう。他の正多面体は表面が正三角形、正方形から成っているのですが、それと違って、正十二面体は十二個の正五角形からできています。ところがこの正五角形は三角形や正方形のように隙間なく平面を埋め尽くすことができません。それにもかかわらず無理に埋めていくと、最初の三枚ですぐ困難に直面するのです。36度の角を残して外側に付けるしかなくなってしまうのです。しようがなく、重ならないように外側に付けてゆくと、至る所に穴のあいた織物が出来上がってしまいます。つまり、正五角形というものは、平面内で完結するためには間隙を埋める、より小さい物質を必要

とするとと言えるでしょう。こうして出来た穴あき織物はどんどんと外側に広がっていくことができるのですが、実はその途中に面白いものが発生します。ループと呼んでおきましょう。前に図1で示したものがそれですが、正五角形十個から成るこのループはとても受け入れられやすいものです。これをL10と呼んでおきましょう。実はループは中に出来る空隙が小さいものも数えるとL6からあって、いくらでもあるのです。



私がL10を気に入っているのは深い意味はなく

その美しさにあるのです。花にもありそうなその形が気に入ったのです。さて、このループは今までの織物と違って平面を二つに、つまりループの内側と外側に分けてしまいます。織物は全体として空隙を作りながらどんどん外へと広がってゆくのですが、その中から出来たL10などはそれまでに出来ていた全体の動きから離れて、その内側にある種の微小空間を作るのです。その微小空間ではL10の場合では正五角形が三枚入ることが出来ます。さて、実際の空間は三次元ですか

らこの二次元平面を使って層状の擬三次元空間にしてみましょう。図1が縦に積み重なってできたある種チューブのような空間では何が起こるのでしょうか。ここでは先ほどの三枚の正五角形は上に伸び重なることができます。そうしてほとんど伸ばしていくと糸が螺旋状の上に伸びていくことでしょう。この四枚目の正五角形は下の正五角形と重なることになりました。その重なり具合は二つの正五角形が菱形を共通部分として持つような重なりです。しかしこの重なりはエネルギー的に許されるのでしょうか。もしこれが許されるなら、初めからこの重なり方で正五角形は螺旋を組んでゆけばよいような気もします。この二つの構造を、これが肝心なところなのでもう少し詳しく見ていきます。初めの正五角形が稠密に並ぶ仕方では第一層が三枚、第二層が三枚、第三層が三枚という風に重なってゆき、十枚三回転で始めと同じ状態に戻ります。以下その構造が繰り返されるということになります。次の、正五角形の重なりを許す並び方では正五角形は次の正五角形と菱形の共通部分を作りながら36度ずつずれながら重なってゆき、十度十枚で一回転して始めの状態に戻ります。一体どちらが起きているのでしょうか。それは正五角形の並びを調べてみれば分ることです。

ヒロ： それは素晴らしいね。それで、結果はどうなったのですか。しかしそれにしても既に現代人だね、テイマイオス。あなたがそれ程の技術を持っていようとは思っていませんでした。

ティマ： 聞きたいかな、そうだろうね。私も聞いてみたい。しかし残念ながら、それはまだ分っていないのです。第一この正五角形が具体的に何を指しているのかが分らない。これがギリシヤの理論の弱いところだね。イデアでやっているの、具体的にと言われても、その具体的なものが分らないのだね。兎に角、イデア正五角形があると思っただきましよう。それが三回転か十回転して元に帰るのが生命の基本だと言うのがこの考えの宣託です。ちょっと気取って神託、いやアポロンの神託と言っておきましよう。

ソクラ： 失礼な、それは私に対するあてつけかね。私の場合は本当にあったのだよ。弟子が神託所から聞いてきたのだ。それでこの正五角形はいつたい何者なのかね。

ティマ： 生命と言えば何といってもDNAでしょう。このDNAが見つかったとき人類はもうこれで生命の神秘は全て解き明かされたような気がしたもので

す。ところでDNAは螺旋状でその基本要素である塩基対が十個で一回転するピッチを持つことが分っているのです。もしこの塩基対に正五角形が隠れているのなら、それはまさに上に述べた二番目のケースとぴたり符合することになります。従って取り敢えずここでは螺旋状に成長する分子（DNAと言っておきましよう）は生命の基本でありそれは正五角形が上で述べたように結合して成長してゆくことになります。

ヒロ： おお、出来ましたね。おめでとうございます。ループの内側ではDNAがチューブの中をどんどん成長してゆくのですね。これでDNAの存在理由はカバーしましたね。そうなる楽しみですね、ループL10の外側では何が起きているのでしょうか。勿論もう一つの生命の基本RNAが出てくるのが予期されるのですが。

ティマ： 有難う、しかしあわてないでくれ。ヒロティウス、あなたは予期するとか言っています、外側にはRNAが出来てくれればいいと思っていませんか。しかしそれは余りに人間の勝手な都合よきと言うもの。そんなに都合よく行くものならば…、とにかく、予断を捨てて冷静に状況を見ていくことにしましょう。

外側についても先程と同じように二つのケースを考えてゆきましょう。まず正五角形が重なることなく、次々と結合していく場合には、前の図3の形が十個くつついてL10を一回りすることになります。

ヒロ： いいですねー、期待に忘れてくれますね。これはtRNAですか。一気に十個も出来てきたわけですね。しかも、L10との間には微妙に空隙が生じていますね。この空隙を利用してここにアミノ酸でもくつつけたくなりますね。： おっ、そうするとL10と相性のいい10種のアミノ酸がここで選択的に付着したことが考えられますね。しかし…、アミノ酸は二十種だった筈、ティマイオス、あと十個はどうなったのでしょうか、どこから来たのでしょうか、あなたの考えを教えてください。

ティマ： 急ぎますね。言ったでしょう、くれぐれも身勝手な発想は慎むようにと。いいですか、基本的に正しい考え方をしていれば、結果はおのずからついてきます。むしろ偏った考え方をしてその場はしのげるが後から困ってしまうようなことにはならないように。もっとも簡単な考えは今十個が付いた外側に後十個付けるというのがありますね。簡単に言うと半径が1.5倍の領域に十個入る訳

ですからアミノ酸の大きさも1.5倍の物まで入れることになります。アミノ酸の大きさは十番目のグルタミン酸でファンデアワールス半径109ですから163まで入れる事になります。そしてそれが丁度トリプトファンになっているのは単なる偶然でしょうか。

ヒロ： それは一体何で調べたのですか。あなたが手に持っているのは何ですか。私にも見せて下さい。これは、表が出ていますね、なんて便利なんだ。確かに十番目がグルタミン酸でファンデアワールス半径109、二十番目がトリプトファンで163と出ていますね。これはあなたが自分で調べたんじゃないのですね。

ティマ： すまん、どうやら現代人はこの手のデータを五万と持っているらしいのだ。今ではこういう端末で簡単に見ることが出来る。まあ最後になって絶対の信憑性が欲しいときは別としてこれで目安を作っていくということでもいいのかも知れないと思ってるね。とにかくヒロテイウス、あなたの希望通りL10の外側にはtRNAを付けて、ついでにアミノ酸二十個の謎まで解明しておきました。おや、どうしました、どうして余り浮かない顔をしているのですか。

ヒロ： いや、確かに、見事に生命の神秘を、DNA、tRNA、アミノ酸と立て続けに説明されましたが、どうも今一信じられないのです。あなたの言うように考えればいいのかもしれませんが、これは確かだと思えるためには何かが必要なのではないのです。

ティマ： そうだね、これはまだ始まりだからね。しかし見るべきところはあるよ。DNA、tRNA、アミノ酸のでき方を具体的に物語っているんだから、これ以上のモデルがない以上、ここからスタートしてどこまで説明がつくものか試してみればいいのではないだろうか。現在は分子から生命ができるところまでのモデルが全くないので生命の発生についてそもそも考えようがないのです。ギリシャ流の生命理論に良いところがあるとすると、ただ想像力が働くということだけでしょう。あの時代には分子を見る装置が全くなかったので、想像力だけが現実との架け橋でした。そして精一杯考えたのですが、あのティマイオスを書くところまでしか行きませんでした。それに比べて現代は観測装置は大きく発展し、分子レベルでの状況も大分分ってきました。しかしその一方では大きな間違いをしでかしたアリストテレスは否定されなければならず、ギリシャの考えそのもの

が否定されて、実験装置によって積み上げた事実データにほんの少しの創造力を加えるだけというのが正統なやり方とされるようになりました。その所為で荒唐無稽な理論は排除されるようになり、科学は安定した進歩を遂げ始めました。逆にその結果として失われたものもあり、その最たるものが、生命の起源と地球科学理論です。全く進まなくなってしまったのです。

ヒロ： そうですね。全く進まなくなってしまうましたね。大地震は容赦なく襲いかかってきますが、誰もそれを予報したり予防したり出来ている様子はありません。科学の

発展が言われているのにどうしてでしょうね。

ティマ： それを解く鍵が、科学の産業化ですね。現代の方法は大量データ、特殊データですからそれに見合うだけの経済的利益が得られないとどうしても活動は停滞します。生命の起源は分子からバクテリアまでの発展がどの程度の難しさかがはっきりしないと予算は出にくいでしょう。現実には起きたことといえれば平気で億年単位の時間がかかっていますからね。むしろ、バクテリアから人間までの研究の方が病気の治療など役に立つことが多いと思われれます。なんの手掛りも

ない生命の起源など予算も付きようがないですし研究者もいないのではないのでしょうか。

ヒロ：　そうですね、最近、ある科学誌に「もはや天才は現れないだろう」という論文が出たのですがその傾向はあと思います。天才と言うのはいわゆる五感の働きの、自然に対して誰も思いつかないような発想をする人のことを言うわけですから、このことは現実を表していると思います。そんな中で、わずかな切り口を探し出して誰も思いつかないような考え方を出し、しかもそれが当たっている、というのが理想なんでしょうが、そもそも、現在では誰もそんなことを期待していないし、実際されても困るということではないでしょうか。もはや時代は眞実を求める状況ではなく、個人の力によってではなく人類の総合力によって着実に進むことが求められているのではないのでしょうか。

ソクラ：　やはりヒロテイウス、あなたは現代人ですね。テイマイオス、私はあなたに賛成です。私たちはどうして命を授けられたのでしょうか。多くの神々がいなかったならば我々の世界は悲惨なものだったのではないのでしょうか。私はアポロンの神託がなかったならば人々と議論することもなく、生きて、戦って、子供

を残し、死んでいったのでしよう。ただ無秩序に生きる代わりに、統一を求め、知恵を出し、もつとも神の道に近いものを考えることでギリシヤは進んできたのです。そうしてみると、生命についても、それがどのように統一を保っているのかを常に考えながら探求を続けていくことが必要ではないでしょうか。勝手に生命について研究して、生命を作り出すことは危険ではないのですか。我々から言わせると敬虔さが足りないということになりますが、人工生命が暴走することはないのですか。神々から我々への引き継ぎはうまくいったのですが、それは敬虔な態度の賜物ではないかと思っっているのです。これを崩すといつどのような厄災が降りかからないとも限らないというのがギリシヤ人の心配なのです。今アミノ酸は二十種なのですが、これが三十種に増えたらどうなるのでしょうか。新たなタンパク質が生まれたら、それは制御不能になるでしょう。現在の生命は全て二十種のアミノ酸からできたタンパク質の下で活動できるようにコントロールされています。そのもとで動いている分には余り問題は起きないでしょうが、人工的に作られたタンパク質が生まれ、ミオシンの十倍の能力を持つ筋肉が出来

たら、それはコントロールできないでしょう。神が許される物のみを作るとい
我々のポリシーは人類にとって十分役に立つものではないのでしょうか。

ヒロ： その視点は今の学問には欠けているものです。今の競争科学は生物の作
るものを全て独立して取り出して作ることに主眼を置いています。この一直線の
やり方は予算をとり成果を出すためには仕方がないのかもしれませんが、少し怖
い気はします。何か事件が起きたとき誰がどう責任を取るのかは全く考えられて
いないでしょう。もっとも、やっている本人たちはあくまで生命部品を作って
いる積りでそれがどういう意味を持つかまでは考えていないと思います。

ティマ： 我々自身が生命の一部であることを考えると、この問題は避けられな
いものでしょう。確かに効率を考えると今のやり方は良いものですが、一寸
見ないうちにこんなに進んだ技術を前にしてはいたずらに試行錯誤を繰り返す
のは避けなければなりません。今の時期だからこそあのティマイオスの思想を再
確認して、自信を持って研究に取り組めるようにする必要があります。

ヒロ： 確かにその問題については遺伝子組み換えという技術があります。この
技術はいきなり人で行って大問題が発生してはいけけないので、まず植物で行われ

ています。通常持ち得ないような便利な性質を持つ植物が出来ています。その植物に寄生する病害虫を駆除する物質を自分で作り出すトウモロコシ、収量の多い大豆などが有名です。しかしこれらは結局、動物の体内に入り、ひいては人間の体内に入る訳ですから、いつ如何なるアクシデントが起きないとも限りません。しかし、生命の発生手順についての全貌を理解するなどということが分るものなんでしょうか。

ティマ： 私の考えでは、生命は発生してから長い年月の間に非常に複雑化してしまっただけですが、元は一つまたはそれ程多くないと思われれます。初めの段階で何が起ったのかさえ分ってしまえば、そこから先は全てを追い掛ける必要はないと思います。とにかく最初の取っ掛かりをつかむことが大切でしょう。さて、心配はいくらしても終わることがありません。結局、必要度に応じて我々の考えは進んでいくしかないのですから、あらゆる方向から進む話の一つとしてこの話も進めていきましよう。

クリテ： ところで、地震理論の方はどうなっていますか。それに付いてもここで論じてみましよう。昔、大西洋にあった大陸が大地震によって海底に没してし

まいりました。今アトランティスと呼ばれているこの大陸に起きたことが果たして現代にも起きるものなのか、どう予知し、どのようによいのか、現代ではどこまで分っているのでしょうか。最近、東日本大震災という屈指の大地震が起きたということですが、それでも陸地の地盤は数メートル沈んだだけでした。これよりはるかに大きな地震についての理論はどうなっているのでしょうか。

ヒロ： あなたの心配する通りです。実は理論はあまり進んでいないのです。この場合は現象が人類の生存時間に比べて余りにも稀であるために、今の枠組みでは殆ど理論が進みようがなくなっているのです。実はこの大震災のときに生じた原子力発電施設事故についても大きな問題が生じており、現在の理論よりかはるかに精緻な理論の必要性が高まっています。思うに全ての現象は確率に応じた対応がなされるべきで、それを欠いた枠組みでは事故から逃れることはできません。今までの楽観的な対応ではなく、起きた現象に応じた対応策が講じられなければなりません。希少確率についての理論が打ち立てられ、この理論が徹底的に進められなければ、今回のような悲劇は避けられず、人間活動に重大な支障が発生することになります。ところで、大震災については……。

ティマ：　ちよつと待つて下さい、ヒロティウス。話が長くなりそうです。前のクリティアスの時と同じように、その話は違ふ本にして、ここでは生命の理論に絞りました。ここまでは正五角形を用いてDNA、tRNA、アミノ酸が二十種類ある理由についてモデルを作ってきました。さて、この様にして出来た、生命モジュールはどのようなようにして組み立てられたのか考えてみましょう。L10において何が起こったのでしょうか。それはまだ生命が生まれる前のこと。海底から徐々に湧き出てくるシリコン、硫黄に混じつてリンも海水中に押し出されてくる。それ程高くない温度で出てきたリンは海水に冷やされて徐々に結晶していく中であちこちでL10結晶がどんどん育つてゆき、チューブに育つたその中には螺旋状の階段が結晶化してゆきます。チューブの中は体積が限られており、地中からの上昇圧力が増すにつれ正五角形は重なりが生じ、やがてはL10結晶からはみ出した螺旋階段が海水の中に伸びだしてゆき、周りに様々な炭素窒素の正五角形構造をくつつけて伸びてゆくのです。勿論これはDNAタイプの一周期十個の正五角形螺旋階段です。一方、L10結晶の外側にはリン原子がくつついてゆきますが、これは比較的広い空間の中で成長してゆくので、正五角形は辺でくつ

つき、三個の正五角形で一つのまとまりとして海水中の物質と化合し海水に溶け込んでゆくのです。状況を見てみましょう。、L10チューブから海水中に伸びだした前DNAは海水中をへちまの蔓のように揺れ動きながら周りの前tRNA Aタイプの分子を拾ってゆきます。前DNAの正五角形に一つずつの前tRNA がくつついていって、あたかもジャックと豆の木の豆の木のように葉を茂らせながらどんどんと成長していったのです。この豆の木がどうなったかについては二つの可能性があります。一つは、この木がどんどん伸びていくうちに、ある時丁度よく自己複製可能な自律体が生じたというケースです。しかし、私はこの可能性は低いと考えています。それは生命発生の確率に対する直感的な評価で、私に言わせれば、これだけ生命の発生が見つからないのは、その発生確率が一兆分の一以下であるからだと思えるのです。この数値はアトランダムに百個のアミノ酸を発生させたとき生体蛋白質が発生する確率と同じですが、この確率の下で生命が発生することは非常に難しいと思います。そこでもう一つの可能性を見てみましょう。これはL10チューブが大量に発生する状況です。地中から大量に湧き出してきたリン鉱石が次々にL10チューブを作ってゆき、同時多発的に正五角

形螺旋階段があちらでもこちらでも発生し成長してゆくというものです。当然のことながら生命の発生確率は発生地点数に比例して上がってゆきます。百万箇所で発生すると発生確率は百万分の一以下と大幅に大きくなります。更に百万倍の時間をかけると遂に生命が発生するのではと期待したくなるというものです。とにかくこのようにして、生命タンパク質が出来たとします。するとそのDNAとRNA複合体はタンパク質のはたらきを借りて、より安定な物質としてしばらくの間生き延びるのでしょう。この様にして実を一つ付けた豆の木は更に伸びていきます。やがて、それは豆の木を離れて波間を漂うのです。タンパク質が付いたために安定となった正五角形はやがてその濃度を増してきます。このようにして徐々に生命タンパク質が増えてゆきます。このDNAとRNA複合タンパク質（DRP）は比較的長く安定して存在していたものと思われれます。そうしてその海域において徐々にDRPは増えてゆき、ある日遂にその一つから生命が生まれたのです。ああ、しかし、私の想像力もここまでです。一体どのような形でこのDRPが生命に発展していったのか、ヒロティウス、クリティアス、ヘルモクラテス、ソクラテス、誰かここから先を想像力の限りを尽くして、ギリシャ理想科

学の粹を尽くして解明して下さい。ギリシャ衰亡の後、芸術、体育以外ではけちよんけちよんにたたかれた我が国の理論を再び立て直して、現代ヨーロッパ科学をあっと驚かしてやろうじゃありませんか。

ソクラ： テイマイオス、あなたの気持ちは痛いほど分ります。しかしこれは私の得意とするところではありません。生命がどのようなようにして発生したか、それはアポロンに訊けばよいことで、アポロンが何も言わないのは聞いてはいけなからでしょう。テイマイオス、申し訳ないが私は聞き手に専念しましょう。クリティアス、大いに話して下さい。

クリ： 有難うございます。しかし、私は大震災について語りましょう。大震災で何が起こったか、それは如何にして防げたのか、昔アトランティスでおきたことを踏まえて語る事ができるでしょう。

ヘルモ： 私ですか、お客さん。私は今とても浮き浮きしています。二千年間の沈黙の時を破って、我がギリシャの科学が甦るのですから。神々から始まった所為もあって、理想的なものイデアを抽出したばかりに現実の裏付けがないとして笑い者になった我が科学が、最も肝心な生命の発生という問題で息を吹き返えそう

とは。私は早速妻にお酒と美味しい料理を作るように言いました。遙かこのアテナイの地まで訪れて真理を探しだす人々に私は限りない賞賛と栄誉とおいしい食事を十分に贈りたいものです。私達は腹の充実感によつて満足を得るのですが、あなた方は脳の充実感によつて満足感を得る素晴らしい方々です。この議論を続けて人間の依つて来たる由来を心置きなく説き明かしてほしいものです。そしてソクラテス、私はあなたの奥さんにも話しておきましょう。あなた方はここで役にも立たないことを議論しているように見えますが、それこそが世界最高レベルの議論であることを。そして、帰つてきたあなたに水をかけたなり、怒鳴つたりしないように言っておきましょう。生命の起源が、分子からどのようなようにして生命が発生したかを解き明かしても、必ずしもそれだけではなんの産業も起さず、利益も得られないかもしれませぬ。しかし、そこでこそ眞実を求める心が生まれるのです。現代の生命科学産業は大発展しています。これは生物の行つていふことを忠実に模倣して、人類に必要な物質を好きだけ作り出すことで成り立っています。ある種の微生物の作り出す生命コントロール物質を利用して細菌を殺し、ウイルスの感染経路を阻害してウイルスに対抗し、癌細胞の発育を抑えるタンパ

ク質をコピーして薬を作るなど、生体分子の構造を調べ、それを人工的に作り出す作業に追われています。勿論、生物の生存システムが分っているわけではないので、この模倣作業には膨大な時間とお金をかけているわけです。人々は、ある者はこの恩恵にあずかり死なずに時を過ごし、他の者はこの費用を払い続けています。この方式はシステムを変えずに個々の部品の性能を変えるようなもので、それなりに効用があり産業化出来るのですが長い目で見ると、徐々に誤差が積み重なってきます。こうして時間を稼いでいる間に、テイマイオス、あなたの方式を進めて生命が何故この様に進化するに至ったか、一体その先には何があるのかをしっかりと見据えていってほしいものです。

ヒロ： テイマイオス、正五角形から出発して、生命の謎を全て説明しようという試みは今まで誰もしなかっただけに、少しずつ何十段か物語りを重ねていかなければなりません。問題はそれで生命の発生に繋がる謎が解けるかですが、一体何が出てくるものかやってみなければ分からないということでしょう。このような研究が必要かと言われるれば現在の経済環境では疑問符を付けざるを得ませんが、百年単位のスケールで見ると難しい判断を迫られるでしょう。現代文明の発

展の基盤は「エネルギー調達は全ての母」というものですが、この考えの基礎になる判断原理としては原子力発電所が挙げられます。これが実用化された最後の巨大エネルギーで、ほぼコントロール可能ということになっていましたが、今回図らずも十分に管理された環境がないと失敗することが確認されました。勿論これではつきりしたことは核融合反応という技術は幸いなことにまだ実用化していませんが、今まで以上に十分な管理がないときは実用化してはいけないということです。エネルギー値を横軸にとりコントロール度を縦軸にとった座標で考えるという発想が必要です。そののなかつた日本は今回の大震災でとてもひどい目に逢いました。普通に考えても巨大被害が予想される自然現象が原子力発電所の所為で桁違い（一桁く二桁）の巨大被害をもたらしてしまつたのです。これは哲学者がいなかつた所為でしょう。科学者がポジティブエンハンサーだとすると、これからの人間社会にはネガティブエンハンサーも必要でしょう。そしてそれが、テイマイオス、あなたをはじめとする哲学者の役割だと思われれます。こうして考えを変えてみると、これから更に発展を続ける生命産業についても哲学は必要だと思われれます。生命産業の場合、エネルギー量はそれ程ではありませんが、

なんせその対象が人間そのものであるために、価値が非常に大きくなります。その指標としてエネルギーオリティー(EQ)というものを考えてみます。簡単にEQ \parallel (人間指数) \times エネルギー \parallel 1000 \times エネルギーとすると、様々な生命産業の必要コントロール値が評価できます。それが現実に合うように係数を調整して未来に臨むことで人間の生存に関する条件を整えていくことができますでしょう。更に、注意すべきはこの人間指数HIは年齢の関数でもありません。但し、ここは議論のあるところでしょうが、支払能力の関数にすべきではないと思います。勿論、産業指数なので支払能力に左右されることは避けられませんが、ここはきっぱりと決めないといけないでしょう。現在のように癌の治療薬に殆どの努力が向けられてしまうと、老人の延命治療にはよいでしょうが人類まっくれ全体のポテンシャルは下がってしまいます。普通思われていることとは違って、癌を撲滅して老人を長く生かすことは、増えすぎた人類を減らすにはよいでしょうが、その極相林が如何にも健全なものでありたいものです。理想的な人類極相林の姿はまだ明らかになっただけではありませんが、少なくとも極相林に達する前に人類が減びないようにするためにはこの生命理論が役割を果たすでしょう。

ソクラ： 人間指数とはどういうものなのかね。1000という数字があてられているようだが、数字に弱い私としてはこの数字がどこから出てきたものか測りかねるのだが。

ヒロ： ごめんなさい。貴方に分らないということは、説明不十分な数字だからだと思います。自分で作ったこの指数について説明してみましよう。癌の治療薬の開発に多くのエネルギーが使われていますが、その結果生み出されるまたは回復されるエネルギーはどれ位なのでしょう。同じなら開発を続けてもいいのですが、もし小さいなら普通の産業では開発中止になります。問題は人間が関係していることです。私はこれを千倍までは許されるとしました。回復されるエネルギーの千倍までのエネルギーを使ってもいいという訳です。もしこれを百万倍まで許すと普通の人間生活が影響を受けると考えたのです。

ソクラ： なるほど、分りました。微妙な問題を含んでいるね。さて、ヒロテウス、あなたは人類が極相林に達するということを簡単に言っているが、果たしてそれは当然のことなのかね。人間の極相林は存在するのだろうか。人類の歴史は高々一万年が確認されていて、後は遺跡で数十万年、化石で何百万年が言われ

ているが、確かに人だと言えるのはいつの頃からだろう。勿論、生物は更にずっと前の三十五億年前には現れていたと言われているが、その間一度も絶滅しなかったのは余りに奇蹟的ではないのかね。一体、生命というものは一度発生したら滅びることはないのだろうか。

クリ： それはそうでしょう。現に我々が今生きているのですから、我々の祖先は絶滅した筈はないですよ。

ヘルモ： それは分りやすいね。証明も簡単だ。もし我々の祖先が絶滅したと仮定する

とその子孫はいなくなる。従って我々もいないという訳だ。しかし我々はいる。ゆえに

我々の祖先は絶滅していないということだね。

ソクラ： しかし、それは我々の祖先が特別だったということなのだろうか。きっと多くの生物は絶滅したのだろうか、どうして我々の祖先は生き延びたのだろうか。しかも、こんなに増えている。我々はこれを当たり前のごとくのように思っ

ているが、これだけの長い年月三十五億年生き続けている。一度や二度は減んでもいい筈ではないのかね。

ティマ： だったら減んだのではないでしょう。ソクラテス。私たちはどうしても結論に引きずられて考えがちですが、減んでも生き返るようなシステムができていれば絶滅することはないでしょう。我々の考えている進化はトランプのタワーのようなもので一度崩れれば始めからやり直しというイメージが強いのですが、例えば人類が絶滅したら、サルの一部が人類へ進化するかもしれませんが、もしそうでないとしたら、とても現在の人類まで進化は出来なかつたと思います。もしそうなら、そのプロセスとしてはRNA主導型の遺伝が考えられるのではないのでしょうか。DNA主導型の遺伝はそのDNAの持ち主が絶滅してしまうとDNAが余りに大きいため確率的に二度と現れませんが、RNA主導型の遺伝ではそのRNAが小さいほど容易に復活可能で、特にRNAがチューブ内で保存されていけばそのチューブを取り込みさえすれば容易に絶滅種が復活することになります。この方式は進化経済学で大いに省エネルギーとなります。一般に長い年月の間にはエネルギーの低い状況はエネルギーの高い状況に比べて圧倒的に起

こりやすいので、このようにして進化が現実を起こることは十分ありうることで
す。このチューブの元は例のリン原子チューブから発生したタンパク質チューブ
に違いありません。どうやらタンパク質は自分だけで生命を作ろうとしたが失敗
し、がっかりしていたところに、リン原子チューブが出現しその力を借りてタン
パク質チューブを完成したらしいですね。ああ、話が擬人法になってきましたね。

私の想像力はどうかやら限界に差し掛かってきたようです
ヘルモ： いや、意外にその擬人法は当たっているかもしれない。我々の信じて
いる「神」だってある意味では自然の擬人表現な訳だし、それによって人類がど
れだけの恩恵を受けたかを考えると生命について理解するためには、我々の持つ
様々な能力を総動員する必要があるのではないかと思います。そう言う訳でテイ
マイオス、あなたの深い考えを更に進めて、生命発生について新しい仮説を出し、
更に擬人法で自然が理不尽なことをしていないのを確認すること、ヒロティウス
のようにエネルギーの観点から合理性をチェックすること、ソクラテスのように
話の流れ全体が互いに矛盾しないかどうかをよく見ることが大事ではないでし

よいか。そしてクリティアスが考えているように広い立場から絶滅の危機を
チェックしていくことが、大切なような気がします。

ソクラ： そうだね、そしてヘルモクラテス、あなたがこれの全体を纏めてスト
ーリーにしてくれるといいかもしれないね。世界中では今や生命現象を産業化す
ることが主流になっていて、それは人類の新たな可能性を開くという意味では
とても重要で、世界の経済はこの基軸の上に進んでいくのですが、この世間の風
潮から離れてギリシャ流の人間理性というものを思いっきり発揮、発展させると
いうこともまた楽しいのではないのだろうか。但し、ここまでの話を聞いて「中々、
面白そうだな。」と思う人は一つだけ注意してほしいことがある。

ヒロ： それは何でしょう、大事なことでしょうか。

ソクラ： もし結婚しているなら、これだけは注意してくれたまえ。しっかりし
た仕事を終わってからのこの研究をすることが大切だ。そうでなかったばかりに
家に帰ったとき奥さんからバケツの水を掛けられた人が昔いたらしい。

ヒロ： まさかそんなこと我々には起きないでしょう。古代ならともかく現代は生
命の発生は科学の大問題として広く研究されています。確かに生命の起源につい

ての理解は現代でもあなた方古代ギリシャとたいして変わらない状況にあると
は言うものの、宇宙で発生したという説と海底の熱水噴出孔で発生したという説
が対峙しているのです。それについて考えることが……」

その時、いきなり建物が揺れ始めた。水差しの蓋が外れ机から落ちそうになっ
ている。水差しも落ちそうである。それよりも何より建物がきしみ出したのだ。ど
こからか女の甲高い声が聞こえる。まさか奥さんが来たのか。ソクラテスはもう
逃げだしている。光宏がもたもたしていると女がドアを激しく叩きながら叫んで
いる。ドアが叩き破られた。その衝撃で光宏は目を覚ました。「早く起きて、マ
ケドニア兵が攻めてきたの。この地下室が見つかるかどうか分らないけど、必要
な資料は早く調べないと。」巫女アルテミスがドアの外で言っている。寝室の外
に出るとソクラテスも出てきた。どこから光が入ってくるのか通路は明るくなっ
ている。

「とにかく昨日の本を見てみよう。この明るさなら大丈夫そうだ。」
二人は正十二面体の部屋に光が当たって神々しいまでに輝いているのを見た。
「おお、明るいね。これはいい。」

確かに斜め上から入ってくる光は地下とは思えないほど明るい。

「あの面に光を集める螺旋がしつらえてあるのです。」ふと見ると巫女のアルテミスの白い服に光が映えて美しい。ソクラテスは早速本を調べ始めた。光宏は部屋構造を見ようとして階段を上って行った。階段は十二個の面を回って上に続いていく。一番上の面は空いていて階段は上にて行っている。いつの間にかアルテミスが、やってきた。

「こちらへおいでなさい。」階段を更に上がっていくと、バルコニーから見下ろすように回りながら明るい壁暗い壁が交互に連なっている。きなり見晴らしのいいところに出た。神殿の上である。どうやらレリーフの人物の中らしい。目のところから下を見ると、マケドニア兵らしい姿が見える。どうやら神殿は完全に包囲されているようである。

「この神殿はどうなるのでしょうか。破壊されてしまうのですか。」アルテミスが心配そうに聞いてくる。

「大丈夫です、この神殿は破壊されることはありません。二千年後でも立派に残っているのですから。でも残念なことにここにある大量の図書は失われてしまいます。」

「そうですか、安心しました。私たちの努力は報われるのですね。」アルテミスの表情には巫女としての役割を果たせるといふ気持ちがあふれて輝いていた。

「図書の方は失われてしまうのですよ。」光宏は意外な気がした。この神殿もそうだが、むしろここにある著作の方が後世には遥かに役に立つのではないかと思えたのだ。

「分っています。勿論どちらも残って後世に伝えられるのがよいのですが。でも、この神殿は神の館としてずっと残ってほしいのです。たとえ私たちギリシャ人がマケドニアに支配されることになろうとも、私たちの神は私たちを守って下さるでしょう。でもこの図書は多くのギリシャの賢人達が表したものです。たとえ破壊されても、アカデメイアの伝統を受け継いだ方々によって再現されることでしょう。」アルテミスのまなざしは希望に溢れていた。しかしこのとき同時に光宏はこのまなざしが曇ることを予感していた。このギリシャ文明は確かに残るので

あるが、図書がなくなったおかげでギリシャ文化は、特にその最も先鋭的な部分でついでに失われてしまうのである。彼の知識では、失われたギリシャ文化を求めて多くの人々が模索するのである。その最も有名な端緒はシュリーマンのトロイアの発掘であった。これによってそれまでは単なる神話と思われていた文明が存在したことを示す証拠が得られたのだが、図書類が殆ど失われていたために、文化については遂に再現されることがなかったのだ。プラトンであれアリストテレスであれ現代社会に影響を与える人物とは目されていない。ソクラテスにいたっては単なる酔狂なじいさん以外の何物でもない始末なのだ。彼らがいてもいいが、いなくとも現代社会は影響を受けないで進歩してゆくというのが常識になっているのだ。果たして本当にそうなのだろうか。

「一度失われれば、この図書は再現されないかもしれませんよ。」光宏はぽつりと云った。

「私たちはどうすればいいのでしょうか。あのマケドニアが攻めてこなければ、私たちは神にさえ仕えていけばよかったのに。ああ、戦争がうらめしい。」その時の憂いを見せるアルテミスの表情は神々しいほどであった。

「いいですか、ここの書庫については出来るだけ秘密にしておきましょう。もしこれらの図書が失われなくて済むならそれに越したことはありませんから。しかし、どうしてもだめなら命を賭けるほどではありません。あなた方はこの地を守って下さい。この神殿が破壊されようとしたら必死に守って下さい。それは上手く行く筈です。」

「分りました。あなた方はこのギリシャの文化を守って下さるのですね。私たちはこの神殿を守ります。でもあなたはギリシャの方ではないのでしょうか。どうして、そこまでして私たちの文化を守って下さるのですか。」

「私の時代においては、世界はものすごく広がっているのです。あなた方はこの後何度か再評価されます。それでも、最後に分らないのは人間がどのようにして生まれたかです。私たちはそれについてとても多くのことを考えましたがまだ決定的なものがないのです。」

「神々が生んだのではないのですか。それは大した問題なのでしょうか。私たちは親から生まれました。すると最初の親がいるわけでしょうか？その親は神々が生んだということでは何の問題もないように思っていました。それがこの後何千年も問題

になるのですか。」その時のアルテミスの純粋な表情に光宏は感動した。確かにその通りだ。その神々はどうして生まれたかとか考えずに素直に人間を認め、その後どう生きるかを考える方がはるかに自然なような気がする。

「アルテミス……。」

「何も知らないのに、勝手なことを言っでごめんなさい。」

「いやそうではない。私たちはこのギリシャ文化から隔たって、全く、別のことを考えているのです。それは、全てを根源に戻して考えると言うやり方で、それによって我々の文化文明は大きく進歩したのです。おそらく、たった一つ、生命の根源は何かという問い以外全てにギリシャを凌駕してしまったのです。それにしては敵はどんどん増えてきていますね。」遠く海岸の方からこちらを指して兵士が増えてきている。

「そうですね完全に囲まれてしまいました。この丘は市内を見渡す絶好の場所なのです。」

その時明るい面が急に変わった。太陽の高度に応じて最も光を集める面が切り替わるらしい。

「降りてみましょう。そろそろ、ソクラテスが何かを見つけたか、聞いてみましょう。」

「もしこの図書が失われるべきものだったら、持ち帰っては如何ですか。この図書の中に他にはない一冊があるなら、それを守ってはどうぞでしょう。」

しかし光宏はそれは出来ないと分っていた。この空間は現実空間ではない。仮想亜空間である。確かに巫女アルテミスを見て感情は動くが持ち帰ることは出来ない。図書についても同じである。図書を読んで感情を動かすことはできるが持ち帰ることはできないのだ。

「ありがとう。あなたにそう言って貰って嬉しい。しかしとにかく戻ってみましょう。」

二人は階段を下りて行った。登るのに比べて降りるのは難しかった。時々、アルテミスを支えながら降りて行く二人は正十二面体の各面にステンドグラスのようなレリーフを見て行った。このギリシャ神話を題材にした絵をアルテミスは説明してくれた。「あれはダーフニスとクロローエ。もう花になりかかっているわ。あのとでも美しい花に。」光宏は今まで聞いたことはあるものの余り興味のなか

ったギリシヤ神話が急に手に取るように分ってきた。この中には人の感情の多くの物がちりばめられているのだ。それが分ったのはある一つの窓であった。その絵に込められた感情がアルテミスの説明でいきなり分ったのだ。確かにこの神殿の巫女をしているだけあって、説明は明快で理知的であったが、それだけではなく余韻のようなものが感じられた。ようやく階段下までたどり着いたとき、ソクラテスが丁度上を見上げていた。

「ありましたか。」

「いや見つからない。どうやらこの書庫にはないようだ。」ソクラテスが気落ちしたように言う。

「そうですね。ここまで来ながら残念です。でも仕方ありません。戻りましょう。」その時アルテミスは光が降り注ぐ上を見ながら言った。

「あなた方にはお分かりにならないかもしれませんが、もしティマイオス続編があるとしても、それは公然と読めるものではないのですよ。多分正十二面体について書くことになるのですが、それは神々のカンバスであるということなのです。」

神々のキャンバスに描かれるべきものは物質にしてしまうと一つしかありません。

「知っていますよ、それは天体でしょう。確か昔の天文学は正多面体を頼りに惑星の軌道を決めたと聞いたことがあります。」

「違うのです。その一つとは、ああ恐ろしいことです。私にはそれを認めることも、否定することもできないものです。でもあなた方は未来からいらした。そして、ティマイオス続編を探しておられる。ということは確かにこのままでは続編は完全に歴史から消えてしまうに違いありません。」

そう言うときアルテミスはすっと立ち上がった。白いドレス姿の彼女は何かを守るために心を決めたときの、あの透き通った雰囲気を表していた。その時階段から兵士が入ってきた。彼らは本には目もくれず食料庫、武器庫を漁り始めた。「仕方がありません。この槌子を思いっきり引っ張って下さい。」アルテミスの言葉に従って、ソクラテスと光宏は二人掛かりで思いっきり引っ張った。床面の正五角形が開き、何冊かの本が現れた。

「これは禁断の書です。ギリシヤの到達した異端の学が書いてあります。これがあなた方の探しているティマイオス続編です。くれぐれも扱いには気を付けて下さい。この部屋は崩れますよ。」見ると上の方の面がゆがんだかと思うと大音響とともに崩れてきた。ついで周りから壁が崩れてきている。壁面のギリシヤ神話を描いたステンドグラスが目の前に落ちてきて二人は思わず後ずさりした。ぽっかりと空いた穴からは神殿の柱が見える。

「さあ上がりましょう。あの柱の中に入れてもいいのですよね。あなた方はそこからいらした。」アルテミスは崩れた正十二面体の横に空いた通路に入って行った。通路は螺旋となって上に続いている。上からさす光はときに明るくときに暗くなつて道を照らしている。

「確かにこれは続編だ。素晴らしい。あのプラトンのティマイオスの続きがここまで出来ていたとは。私の書いた新ティマイオスが恥ずかしくなるような内容だ。」歩きながら読んでいたソクラテスは明らかに興奮していた。

「全部読んだのですか。」

「いや、古い言葉なので、現代ギリシャ語と違ってよく分らないところもある。この本を持って帰れば良いのだが歴史を変えることになる。」ソクラテスは困ったような顔をしてアルテミスの方を見た。

「私も、先ほど話を聞いて、どうせ失われるなら…と思ったのですが。」

「確かに、持ち帰りたいたいようだがそれは出来ないでしょう。となればここでもう暫くこの本を詳しく調べてみてはどうでしょう。」光宏は時空を越えることでこの本が失われることが確かでないならばいちかばちか持ち帰ってみればよいのかなと思いつながら危険を冒す度胸は今ひとつないのだった。「この本を守って下さい。私に出来ることなら何でもしますわ。」アルテミスはもう書物をソクラテスに託したいような様子だった。神殿は残り、書物は失われるという予言を聞いてから彼女は何としてもこの書物を後世に残したいと言う気持ちが強くなってきたのだった。

「それにしてもアルテミス、この正十二面体はすばらしいステンドグラス構造でしたね。外からの明かりが絶妙に差し込んでくる。ここで本を読んでいると思わ

ずいつまでも読んでいたいと思えてくるほどです。」ソクラテスは意外とのんきなことを言っている。

「ソクラテス、たぶん急がないといけなんでしょう。今、階段の上の覗き窓から見たのですが兵たちがもう神殿に入りかかっています。それで、ティマイオス続編にはどんなことが書いてあったのですか。実は私は昨晚夢を見たのです。」光宏は夢のことを話した。

「素晴らしい。貴方もそう考えていたのですか。ティマイオスの第五の元素に生命をあ

てはめるとは。多分同じことを言おうとしているのでしよう。まだ、全てを読んだわけではないのですが、この本の中では神々に対する十分な考察と、おそらく神々を否定したり出来ないのも様々な工夫を考えて何とか天球世界に閉じ込めようとしています。正十二面体は神々の絵を描くキャンバスであるというアイデアを大事にしたのでしよう。そして生命が元素だとするとどういうことが起きるか慎重に考えているようです。顕微鏡がなく岩石にしか見つからないこの構造のために立方体の中から正十二面体を生み出すのに苦勞しているようです。」

「私達神に仕えるものの間ではこの本は決して読んではいけない物として伝わってきました。この本が開かれるときギリシヤは基礎を失って崩壊すると言われてきました。今マケドニアの兵が来たのはまさにその証でしょう。噂は聞いています。ギリシヤ最高の知性を教師として学問をおさめた王が武器の力で全土を支配してゆくのです。」

「うかうかとはしてられないようですね。ソクラテス、この書物を現代に持ち帰ることが出来るかどうか分かりません。とにかく読める所まで読んではどうでしょうか。私はその間、ここからの脱出の方法を考えます。」

「その通りだ。とにかく読んでみましょう。」

ソクラテスが読んでいる間にも回りはだんだん騒々しくなつてゆく。

「そう言えば、この正十二面体は宇宙に通じているという話を聞いたことがあります。」

そう言われてよく見ると、ギリシヤ神話の描かれた面の一つがかすかに光を放っている。

「あの面に飛び込んでください。私がおもりを井戸に落とします。」

その時、地下室の入口から兵が、マケドニア兵が更に侵入してきた。反撃がないのをいいことに食料品、像などを勝手に入口まで運び始めた。

「ソクラテス、引き上げましょう。危ないです。」

光宏が行った時ちようと兵がソクラテスの本を取り上げたところだった。剣で切られそうになって辛くも逃げてくる。

「あの面まで登りましょう。アルテミス、大丈夫ですか。」

「はい、準備はできています。急いでください。」

二人は、螺旋階段を上って行った。そして上の面にたどりついたときアルテミスがおもりを井戸に投げ込むのが見えた。すべての面が著しくゆがみ、二人は気を失ってしまった。

第3章 失われた哲学

二人が気がついたとき、既に日は傾き、パルテノン神殿は夕陽を背に浮き上がって見えた。

「大丈夫、ソクラテス。何とか無事に戻ってこられたようだけど、私達は夢を見ていたのかな。」

「二人で同時に夢を見るものならね。それはともかく、とてもよい経験だったよ。この本にかいてあることがよく分ったような気がする。」そう言いながらソクラテスは持っている本を開いた。本は表紙が少し痛んだような気がするが、まだしっかりしている。

「それであの古代ギリシャのテイマイオス続編はどうだったんですか。」

「あれには正五角形、正十二面体についてのことがかなり書いてあった。神、デーモン、生命がどのようなようにして生まれるのかが書かれていた。想像力が溢れているのは観察力がない所為だとはよく言うが、まさにそれだったね。微生物を知らない生物学者が精いっ

ばい考えた様子がよく分るよ。ピタゴラスから始まった数の魔法を徹底的に追求した結果だったね。そして遂に、生命の発生の秘密にあと一步というところまで到達したんだね。この研究が侵略で完全にストップしたのは返す返すも残念だった。」

「そんなに生命の秘密に迫っていたのですか。」

「確かに五番目の立体という概念は素晴らしい。時間さえかければ、恐らく生命理解の突破口になったことだろう。現在、生命の発生について何のアイデアもないのはまさにそこが止まってしまったからだと思われるのだよ。」ソクラテスは古代ギリシャの哲学者のように夕陽を浴びながらため息をつくのだった。

「もしマケドニアが攻めてこなければどうだったのでしょうか。」光宏は現代のギリシヤ人がどう考えているか知りたくて尋ねた。哲人は夕陽から目を返した。

「恐らく、古代ギリシヤがあればほど壊滅することはなかっただろう。類まれなギリシヤの語りが滅びることもなかっただろう。確かに、書物にすることもなく進んでいたこの文化は侵略によって消えてしまったのだ。その中でもいくつかの文献に残され、プラトン、アリストテレスの哲学は生き残ったが、多くの言葉はエーゲ海に消えてしまった。海の泡となった言葉は微かに断片として残ったものの、多くの貴重な言葉はそれこそ水

の泡となったのだ。その後のローマ帝国はギリシャ文化を敷衍して文化を作ろうとしたのだが、かろうじてローマ神話を作り、いくつかの哲学を断片的に収集したのみで終わったのだ。その断片からできえ、十四世紀ルネッサンスは芽を出したのだが、所詮全貌は伝わらなかった。それ程に、古代ギリシャは徹底的に葬り去られていたのだ。しかし、今まで生命の絶滅は五度あったと言われているが、今でも生命は存在している。どんなに過酷な破壊も完全ではないのだ。現にここにティマイオスのカタログがあり、ティマイオス続編が語られているのもその現れなのだ。私は確信する、生命がどのようにして発生したかを古代ギリシャ人は考え、ミクロな存在を知らずに、ただ想像力と幾何学だけで構想しようとしたのだ。何という無謀な企てだろう。失敗するのも無理はないが、それをしようとして遮二無二頑張ったのだらうね。それが記録にほとんど残らなかったのは良かったのか悪かったのか。少なくとも数学はギリシャの影響を受けて生き残り、現在も発展を続けている。しかし、科学は、ギリシャの科学は生き残らなかった。完全に崩壊してしまったのだ。その後、顕微鏡をはじめとしてミクロな物体を見る技術が整ってもそれは新たな科学を生み出しはしたものの、イタリア以西でしか発展しなかった。ギリシャは完全に忘れられてしまったのだ。しかし、私、ソクラテスは科学においても

ギリシヤは世界の中心だったと思う。それがこの生命の起源に現れているのだ。」そう言うと、ソクラテスは深いため息をついた。

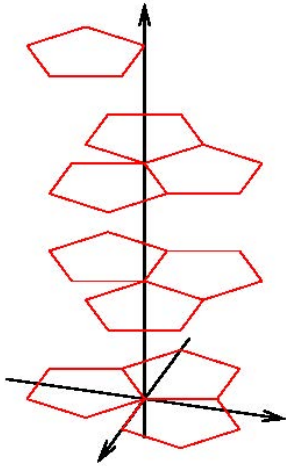
「分りました。私も協力しましょう。確かに、ダーウインの進化論が世界を震撼させた後、世界は哲学を捨ててしまいました。ギリシヤのような語り口は多くの詭弁を生んでしまいます。語る言葉の対数個しか真実が出ないようでは、もはや語ることは無駄になります。それだったら何も語らずに真実をのみ探し求める方が効率が良いと我々は思っています。それが現代文明です。次々と実験結果を出し、役に立つものを作り出すことで社会は大きく成長しました。初めのうちは自分たちで考え出していたのが、ついになんでもない究極の思考節約術を思いつきました。少ない人間が考えるより、圧倒的に多数の生物に考えさせるといのがそれです。微生物が自らの生存のために作り出した抗生物質を人間が見つけたしてから八十五年、今では百種類もが使われています。この手法はあらゆる場所に使われ始め、生物が三十八億年かけて獲得した物質を探すのに人類は全力を傾注しています。現代はまさにその頂点にあります。その一方でソクラテス、あなたが言うように人類が世界を理解するといふ考えはしばらくお休みということになっているのが将に現代です。ソクラテス、そんな時代にギリシヤの賢明を忘れず、

生命理論の根本を考えるのも素晴らしいと思います。あのティマイオスそしてティマイオス続編を更に進めて何が得られるのか非常に興味があります。ダーウィンがバクテリアから哺乳類までの進化の基礎を提案したのに続いて、無生物分子からバクテリアまでの進化を説明することができれば人類の叡智は一段と進んだと言えます。私はまずこれに挑戦してみましよう。」

「光宏さん。貴方にあえてよかったです。私は偶々ティマイオスの続編があることを知り、ただ興味だけで新しい本を作りこの続編が正しかったという結論が出るのを祈るばかりです。ギリシャの先人が打ち立てながらも戦争のために壊滅したこの哲学が復活するならば、私はこれまで生きてきたかいたがあるというものです。」そう言うソクラテスは持っていた本を渡した。そうだこの本は神殿の入場料の代わりに光宏の物になっていたのだ。まだこれから見るべき遺跡は数多くあるが、自分の見た夢とこの本と恐らくソクラテスが語るであろうティマイオス続編の内容を纏めればこの旅行に來た意義は十分にあるような気がするのだった。ギリシャ人はなんでも基本から分ろうとする人達だった。ユークリッドが幾何学で見事な成果を上げ、ピタゴラスは音楽が整数を用いて構成できることを示した。しかし、彼は正五角形でつまずいてしまった。それは一筋縄

ではいかな難しきを持っていたのだ。そしてプラトンはユークリッドの幾何学とピタゴラスの数論を合わせて宇宙そのものが幾何学で構成できることを示そうとした。ところが、何としたことか正二十面体つまり正五角形の面でプラトンも頓挫したのである。それに見合うような元素は遂に発見できなかった。全てはそこで止まったままだ。現在、光宏が関わっている科学はもっと現実的なものだ。宇宙の真実を探すのではない。分りもしない真実を追い求めるのではなく、現実の生物たちは何をしているのかを観察するものだ。何故そうしているかわ分らなくとも、どのようにして生き延びているのかを知り、その模倣をするもしくはもつとまう模倣すること人間も生き延びることができると。少なくとも生物が三十八億年かけて作り出してきたものを全て学びとるには、現実の生物の一万倍の速さで作りに出して行っても三十八万年かかる。人類がこの試みを始めてまだ二百年、まだまだ先は長いのだが、ふとした旅の徒然に「生命は分子からどのようにして発生してきたのか」を考えてもいいような心のゆとりを持たただけでもギリシヤに來たかがあると思う光宏であった。しかも來てみれば、昔の哲学者と同じ名前で既に本まで出している人がいる。そうだ、このギリシヤの文化を現代に伝えてみよう。現代人はこの文化を継承できるのだろうか。確かに、忙しい現代に真実など探している

暇があったら、よりよい生活を求めて働くべきではあろう。しかし、生物というのは多面的である。主流もあれば支流もある。多くの流れが流れていく中に未来が見えて来るのだろう。分子から生命の基本バクテリアまでをギリシャ流に構成すれば、それは第一にとっても面白いことだろう。第二に現代科学の流れとの比較はとても興味深い。現代科学は生命進化について一つは宇宙生物学として地球以外の惑星を探し、もう一つは深海熱水活動起源説とあるが、ここにもう一つ純粹幾何生命発生学説を持ちこむことは科学とは言えないが、ギリシャ文化の延長とは言えるのではないだろうか。ホテルに向かうバスの中で地中海とオリブ畑を見ながら、アルテミスやソクラテスそして夢の中のヒロティウスのことを思い出す光宏であった。



2014年8月31日

後書き に代えて

毎日散歩に出ていました。

二〇一六年五月二十二日

浦田信夫

浦田信夫

〔昭和22年(1947)〕



平成二十八(二〇一六)年七月三十日

編集・構成

平成三十一(二〇一九)年四月

